

「新・山手樹一郎著作年譜」およびその制作過程

影山 亮

【山手樹一郎という作家】

山手樹一郎という作家を一体だけの人々が知っているだろうか。テレビドラマの時代劇「桃太郎侍」の原作者だと説明すれば合点がいく人々も多少はいるだろうが、おそらく文学を研究している者でもその著作を読んだことがないのはもちろん、名前すら聞いたことがないのが実情だろう。しかし、もしかしたら読書行為を娯楽として享受している一般読者の中で、特に時代小説を好んで読んでいる人々の中には、著作を読んだことや名前を聞いた人がいるかもしれない。

実際、山手は四〇〇以上の著作を発表し、多くの一般読者に愛読され、毎日新聞社刊の『読書世論調査』内の「あなたの好む著者、執筆者は誰ですか」や「好きな著者とその作品」というランキングに、昭和二七（一九五二）年度から昭和四二（一九六七）年度にかけて自身とその著作が度々名を連ねている。昭和三四（一九五九）年度に至っては、全体の八位にその名前がランクインしている。また二〇一三年六月現在までに六一の著作が映画化され、昭和九（一九三四）年一月三一日から公開された「武道大鑑」（原作が『一年余日』、伊丹万作監督、日活）は、同年の日本映画部門の興業成績第四位にランクインしている。さらには四度の舞台化、一〇度のラジオドラマ化、五度のテレビドラマ化など様々な媒体で一般読者の目（耳）に触れ、昭和五三（一九七八）年に逝去した後も様々な再録本が出版されている。昭和三五（一九六〇）年には講談社から全四〇巻、昭和五〇（一九七五）年に桃園書房から全一五巻、昭和五二（一九七七）年に春陽堂から

全八四巻、昭和五五（一九八〇）年に再び春陽堂から全一二巻の全集も出版されている。また山手の純粋な著作とは言えないが、平成二〇（二〇〇八）年以降、漫画化もされている。

加えて、かつては貸本業界においても山手の人気は凄まじかった。金沢市内の貸本屋調査を行った、芳井先一の「貸本屋調査から―公共図書館と民衆を結ぶもの―」（図書館雑誌）昭和三一（一九五六）年六月、日本図書館協会内で「人気作家・読まれる本」という調査結果がある。ここで、

蔵書構成はその地域の利用者によってさまざ。勿論山手樹一郎の作品はどんなものでも、という共通したものもあって、中はおおむね限定される。（略）どの貸本屋でも一位山手樹一郎、二位中野実で、三位からは遊興街を除いて、江戸川乱歩、富田常雄、横溝正史、吉川英治、源氏鶏太の順序となっている。（略）以下種類別にみた人気作家は次の通りである。（時代小説）山手樹一郎、吉川英治、角田喜久雄、野村胡堂、大林清、村上元三、陣出達郎、山岡荘八、大仏次郎、子母沢寛

というように、時代小説部門ではもちろん全部門でも一位に輝いている。また社会心理研究所の「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」（『文学』昭和三二（一九五七）年二月、岩波書店）の「好きな作家」の項目においても、夏目漱石、江戸川乱歩、山手樹一郎の順でランクインしている。これらの資料からも山手の人気ぶりがうかがえる。その人気は所得にもつながった。なかのしげはるの「文芸時評―外とのつながり（二）―」（『新日本文学』昭和三〇（一九五五）年

五月、新日本文学会)によれば、

この発表(昭和三〇「一九五五」年三月一日の国税庁発表・執筆者註)では、去年の文学者の収入(所得税がかけられる申告額)がこんな風になっている。吉川英治、川口松太郎、山手樹一郎、富田常雄、舟橋聖一、菊田一夫、丹羽文雄、伊藤整、大仏次郎、谷崎潤一郎、北条誠、野村胡堂、源氏鶏太、吉屋信子、山本有三、井上靖

というように、山手樹一郎は昭和三〇「一九五五」年の文学者の収入で第三位となっている。また昭和五三(一九七八)年三月十七日の『読売新聞』に山手樹一郎の死亡記事には、

一五年(昭和・執筆者註)の「桃太郎侍」で人気を博し、一九年の「崋山と長英」など戦前、戦中にすでに代表作を次々に発表、戦後も二三年の「又四郎行状記」をはじめ「夢介千両みやげ」などで、現在まで広い愛読者層をつかんでいた。(略)山手作品は戦後の一時期、貸本屋の「ベストセラー」といわれ、三三年ごろは作家の所得番付のトップだった

と書いてある。著作の発表年号は間違っているが貸本業界はもちろん、山手樹一郎が作家の所得番付で一位になるほどの人気だったことが分かる。

また山手は職業作家になる以前、編集者として雑誌社に勤めていた。特に昭和二(一九二七)年に入社した博文館では、『少女世界』で編集と読者からの作文の

選評をし、『少年譚海』、『新少年』、『幼年画報』の三雑誌では編集長をしていた。その中でも昭和七(一九三二)年八月の一三巻八号から昭和一四(一九三九)年一〇月の二〇巻一〇号まで『少女譚海』の編集長をしていた頃は敏腕で有名だった。当時博文館の雑誌に著作を発表していた盟友とも言える山本周五郎は「畏友山手樹一郎へ」(『時代傑作小説』昭和三五「一九六〇」年九月、三世社)で、

大衆小説を初めて書かせてくれたのは、山手樹一郎だった。(略)ともかく金の必要があるから、書かしてくれと言うと、彼はじやあ俺の言う通りに書くかと念をおすので、よし何でも言う通りにすると約束した。それで、書き上げたのが『疾風のはやて丸』という少年時代小説だった。たしか五〇枚ぐらいのもので、彼の言う通りに三度書き直して持つていつて。それが、僕の大衆小説というものに入つた最初だったんですね

と回想し、大林清は「山手氏と『譚海』」(『大衆文芸』三八巻六号、昭和五三「一九七八」年七月、新鷹舎)で、

私をはじめで知った頃の山手樹一郎は、博文館発行「譚海」の編集長井口長二氏であった。(略)「譚海」は今日でいえばジュニア雑誌とでもいうのか、少年少女雑誌よりいくらか読者の年齢層が高く、時代、冒険、推理、ユーモア、純情、熱血、といったあらゆる種類の小説を、しかも、読切りばかり並べていた。一篇の長さ一七枚が鉄則だった。一七枚の中に山あり谷あり、いかに感動を盛り込むか、笑いを織り込むか、手に汗握らせるか、それが勝負

どころだった。編集長山手樹一郎はどうしたら読者に受けるかという、実に適確な尺度を持っていた。その尺度にはまらない作品は不合格になる。(略)

山手樹一郎の井口編集長は、私たちの貧乏生活を百も承知していた。その辺が情に厚い氏の面目躍如たるところだが、作品を不合格にしても決して突き返すようなことはなかった。どこをどうしたら合格の線に持つて行けるかを、一緒になって考えてくれるのだった。(略) 私が原稿を渡す。あらかじめ、何を書いて来いといわれた訳ではない。時に冒険小説もあれば、時代小説もあり、純情小説もある。編集長はその原稿を持つて出て行く。およそ二〇分ほどして彼は戻って来る。私はその手許を見る。もし彼の手に原稿が持たれていたら、これは不合格で書き直しである。空手なのを見ると私はホッと胸を撫で下ろす。空手の時は山手氏の顔も明るい。「面白いね」それだけしかいないで、あとはお茶を飲みに行こうかなどということになる。書き直しの時は、こっちの身になって知恵をばっぼってくれるが、「下に出してあるよ」と、椅子を立ちながら氏はいう。原稿料のことなのだ。(略) 私たち「譚海」の常連は、いつまでも山手氏の情誼甘えていられないのを知っていたから、三四円の定収を土台にして、やがてそれぞれの道を開拓して行った。いうなれば「譚海」は私たちにとって、作家として巣立つ前の道場だったし、山手氏は道場主だった

と述べている。さらに長らく山手樹一郎の著作の挿絵を描いていた中一弥は「挿

絵の『お銀』、『山手樹一郎全集 八巻付録』昭和三五〔一九六〇〕一月、講談

社)において、

私をはじめ山手さんにお会いしたのは、昭和八年の春頃である。当時山手さんは、博文館の少年少女雑誌「譚海」の編集長をしておられ、同じ博文館の雑誌「文芸倶楽部」に描いた私の挿絵を見てお気に入り、文芸倶楽部の編集長の紹介でお目にかかった。(略) かねがね私の絵の師匠である小田富弥先生から、「博文館で絵のわかるのは、譚海の編集長だけだ」と聞いたことがあったので、なおのことその思いを強くしたのだろう。(略) 絵の人物の顔や手足の動きなどに注意をあたえて下さったり、絵は机の上ではわかり見えないで、時々手に持つて、眼から離して見るとまずいとこがよくわかるもんだよ、などとべんたつして下さったが、この、眼から離して見ることは、全くもってそうしなければいけないので、このことは、絵の師匠から教わったのではなく、実は山手さんから教わったもので、今でも実行して、山手さんの言葉を思い出しているのである

と記している。加えて海音寺潮五郎は「たぐいまれな資質」(『山手樹一郎全集 二五巻付録』昭和三六〔一九六一〕年三月、講談社)で、

国許から文学をやりたいという青年が出て来て、ぼくの家に寄食することになった。(略) ぼくは紹介状をつけて山手君のところへ原稿を持たせてやった。青年は出かけて行ったが、仰天しきった顔をして帰ってきた。「第一章に何らかの形で主要人物が全部出そろわなければならない。会話の文章は三行をこえてはならない。地の文章は五行以内におさめるようにせよ」と、山手先生

は言うのです」という。これは山手君が編集者として多年読者に直接触れながら作家としての勉強をして来て悟達した小説技法なのだ。(略) 山手君のこゝとは直感にすぎ、即物的にすぎ、理論がないが、つまりは小説技法とは読者心理の上に立っての物語展開の技法であるという意味にちがいない。それをぼくが悟ったのはその時から一〇年立ってからのことだ。ぼくはそれを疎開中ひまにあかして東西古今の名作を分析解剖してみても、やっと悟ったのだ。山手君がいかに若い時からしつかりしたものを掴んでいたのかの証拠になる

と振り返っている。一般読者に人気を博した「小説技法」は、この敏腕編集長時代から持ち合わせていたと言える。このように一般読者の需要に応え、その娯楽に貢献し、人気を博した山手だが、現代では一般読者に一定の需要がありながら研究者や文壇には黙殺されるという、いわゆる大衆文学作家に多く見られる状況に見事にあてはまっている。その最たる象徴として著作年譜が挙げられる。

これまで山手の著作年譜は平成二五(二〇一三)年現在、管見の限り一三本ある。しかし、その膨大な著作数にも起因して既存の著作年譜全てに誤りが多く、著作や初出年月が正確に網羅されている年譜は存在しない。これでは山手樹一郎著作との比較や、その時代におけるメディアとの結びつきなど、いわゆる同時代性が非常に重要となってくる。そのためには作品の初出年月や初出紙誌が明確でなければならぬし、もちろんそれには正確な著作年譜が必要不可欠である。そこで今回「新・山手樹一郎著作年譜」を製作した。この年譜でも若干の初出年月、初出紙誌不明の著作は残ったものの、ほとんどの初出年月と初出、初取紙誌

まで記載したほぼ完全に正確な著作年譜となった。さらに今回の調査では、単行本化されていない山手の著作や随筆も新たに数多く発見した。それらも「新・山手樹一郎著作年譜」に加えた。しかしこの年譜を製作するにあたって直面したのは、山手樹一郎関係の資料を発掘することの困難さであった。

【訂正の困難】

新・山手樹一郎著作年譜を製作するにあたってまず確認したのは、既存の著作年譜である。山手自身が製作した「山手樹一郎略年譜」(『時代傑作小説』昭和三五〔一九六〇〕年九月、三世社)は、管見の限り最古の年譜である。その点では後の年譜に良い意味でも悪い意味でも多大な影響を及ぼしている。この年譜は昭和三四(一九五九)年までの記載であり、著作の初出紙誌も書いてあるが巻号の記載が無く、さらに誤りが非常に多く、抜けている著作もまた然りである。この年譜が後の年譜に悪い意味でも影響を及ぼしているというのはそういうことである。一方で最も参考になったのは八木昇の「山手樹一郎年譜」(『大衆文学大系 二七』昭和四八〔一九七三〕年七月、講談社)である。この年譜はこれまでのものに比べ格段に詳細なもので、昭和四七(一九七二)年まで書かれており、誤りや抜けている著作は相変わらずであるものの、多くの著作は初出月まで記載されており、またいくつか単行本の出版社の記載もある。初出月まで記載されているのは、先にはもちろん、後にも八木氏のそれのみである。だが全著作に記載されているわけではない。さらに誤りもあるため、今回製作した「新・山手樹一郎著作年譜」では全著作の初出月まで正確に記載した。しかし、八木氏の年譜が最も参考になったことには変わりはない。

実際に調査を始めると、まず既存の年譜全てにおける初出年月の誤りの多さに直面する。おそらく山手の著作で最も著名な『桃太郎侍』の初出は、現在でも昭和十五年の『岡山合同新聞』とされている。参考にした八木氏の年譜でもそうである。そんな中、昭和三四「一九五九」年一月に出版された単行本、『少年の虹』（東都書房）の著者略歴で「昭和十四年、処女長編『桃太郎侍』の執筆を機として…（後略）」と書かれている。その後、佐々木浩が昭和五四「一九七九」年三月の『国文学 解釈と観賞』（至文堂）で山陽新聞社編集局資料部に問い合わせ、その書簡をもとに初出年は昭和一四年一月二日から翌年の六月三〇日までと訂正している。そして翌月に出版された『大衆文学通史・資料 大衆文学大系別巻』講談社）でも担当者の磯貝勝太郎によって初出年が訂正されている。しかし、それ以降の年譜や再録本においても未だに『桃太郎侍』の初出年は昭和一五年となっているのが現状である。今回国立国会図書館で実際に『岡山合同新聞』を調査したところ、『桃太郎侍』の初出年は、佐々木氏の訂正の通り昭和一四年一月二日から翌年の六月三〇日までであった。

山手の年譜においてはこのようなケースが非常に多い。八木氏の年譜によると、昭和二四（一九四九）年『講談倶楽部』（大日本雄弁会講談社）が初出となっていた『豆腐屋剣法』だが、実際には昭和二五（一九五〇）年が初出年である。同じく昭和三〇（一九五五）年『講談倶楽部』が初出となっている『青空剣法』も、実際には昭和二九（一九五四）年が初出年である。これらの場合は一年の誤差である。だからその年に著作が見当たらなくても、その翌年や一年前を見ると見つかるのでまた案である。

これに対して八木氏の年譜では漏れているが、他の年譜で昭和三二（一九五七）

年『主婦の友』（主婦の友社）が初出となっている『雪の駕籠』という著作がある。この著作を発見するのが大変だった。実際の初出年は、昭和二九（一九五四）年なのである。つまり翌年や一年前を見ても掲載されていないのだ。こういった場合は、手間はかかるが一年ごとに見ていくしかない。大正期の『主婦の友』は総目次が出版されているが、昭和期はないので一冊ごとに見ていくしかない。『主婦の友』は月刊なので、一年二冊ごとに見ていくのだ。月刊ならまだしも、『毎日グラフ』などの場合週刊だからさらに手間がかかる。

こういった作業には貸出数が決まっている国立国会図書館ではなく、公益財団法人日本近代文学館などの施設が適している。この施設なら、一年ごとに雑誌を貸出閲覧が可能である。それだけでなくここはマイクロフィルムではなく、冊子本体のまま保存してあるので、実際に雑誌を手にとって閲覧可能である。その結果、昭和三七（一九六二）年『小説倶楽部』（桃園書房）一五巻五号に掲載された『季節のことば』といった、随筆類も新たに多く発見するに至った。今回の調査では大変お世話になった施設の一つである。以上のような、既存の年譜に記載されていた初出年を訂正するのは次第に当たり前の作業になり、一年誤っていても何とも思わなくなるほど多くあった。

【連載ものの困難】

次に直面した困難は、連載ものの終了時を確認する作業だった。そもそも既存の著作年譜では読み切りなのか、連載ものなのかが判別不能である。初出年月が書いていないものが多いのだから当然と言えば当然である。実際に初出紙誌で確認して、初めて連載ものと分かる著作もあった。単行本化されていない著作の

連載ものがそうである。雑誌の連載ものならば、先述した日本近代文学館などでまとめて一年ごとに閲覧出来るが、大変なのは新聞連載ものである。この場合は、国立国会図書館で新聞を一日ずつ確認するしかない。大抵の新聞連載ものは一年間の連載だと次第に判明したが、その日にちまで確認するにはやはり一日ずつの確認になる。また昭和三六（一九六一）年二月一九日から『報知新聞』で連載された『侍の灯』は、連載終了が二年後の三月一〇日なので非常に大変であったが、結果として既存の年譜とは一線を画した、連載開始から終了まで記載した「新・山手樹一郎著作年譜」の完成に至った。

【新発見の喜び】

今回の調査では先述してきた困難だけでなく、新発見という喜びも非常に多くあった。例えば山手が編集長を務め、執筆もしていた博文館刊行の『少女譚海』という雑誌があった。この雑誌は現在では、所蔵している図書館が少ない。今回の調査では、東京都立多摩図書館、財団法人三康文化研究所附属三康図書館、財団法人大阪児童文学館に所蔵されていることが分かり、それら全てを閲覧した。山手が『少女譚海』にいくつか著作を発表しているのは、既存の年譜でも分かっていた。しかし実際に『少女譚海』を創刊号から現存する巻号まで確認すると、これまでの年譜にもなく、単行本化もされていない、もしくは年譜にはあるが単行本化されていない著作を新たに多く発見出来た。その中には、実は若殿でありながら、浪人に身をやつしている主人公桃太郎侍が、お快な女と義賊の手下と共に、お家乗っ取ろうと企む悪を倒し、百合姫と結ばれるという話の筋からも『桃太郎侍』の試作版と言える『飛燕一殺剣』（昭和一一（一九三六）年三月から五月に連載）

といった重要な著作も含まれていた。この著作は、八木氏の年譜において初めて記載された。しかし単行本化されておらず、もちろん全集にも載っていない。『飛燕一殺剣』については山手自身が、武蔵野次郎との『対談』時代ユーモアの創始（『日本伝奇名作全集 八』昭和四五年「一九七〇」年五月、番町書房 内において「あれ『桃太郎侍』…執筆者註）はね、ほかの題で一ぺん書いていることがあるんです」と発言している。言及はされいながら、発見がされていないという山手樹一郎研究における独特の状況が、一つ解消された。また小説類だけでなく、口絵に附した『幕末海軍の創生』（昭和一八「一九四三」年七月）といった著作の発見にも至った。

その他にも博文館刊行の雑誌を現存する巻号全て閲覧した結果、既存の年譜には記載全くされていない著作を新たに多く発見するに至った。昭和三（一九二八）年九月に本名、井口長次（筆名は井口長三）の名で『少女世界』（博文館）に発表された『西瓜の爆弾』や、昭和四（一九二九）年二月に口井蝶耳のペンネームで『朝日』（博文館）に発表された『松さんの禁酒』もそれらである。この点では三康図書館にご協力をいただき、大変お世話になった。加えてあらゆる出版社の大衆文学系の雑誌を出来る限り多く閲覧した結果、昭和三八（一九六三）年に『ゴールド絵本』シリーズ（講談社）の文章を担当した『安寿と厨子王』、昭和四三（一九六八）年八月に『サッポロ』（サッポロビール株式会社）に発表された随筆『タクシー嫌い』も新発見の一部である。

また最大の新発見と言えるのは、山手の童話である。山手は本名で多くの童話を執筆した。先述の山手自ら制作した年譜にも、「大正六年（一九一七）一八歳 博文館発行の『幼年世界』に童話などを寄稿」と記載されている。しかし、この記

述が後の年譜にそのまま孫引きされているだけで、実際には童話は発見されていなかった。今回、『幼年世界』（博文館）などの雑誌を調査して、それらを新たに数多く発見するに至った。その結果、山手樹一郎の最初の著作は大正六（一九一七）年『幼年世界』に発表した『鸚鵡の声』だということも新たに判明した。

以上のような過程を経て制作した「新・山手樹一郎著作年譜」を以下に掲載する。あくまで著作年譜なので山手樹一郎自身のこと、誕生、現在の豊島区への転居、博文館退社、逝去、著作の入选、佳作、受賞のみを記入した。ゴシック体の太字になっている著作は、今回新たに発見した著作である。各著作の発表月日、巻号に関しては、これまでの年譜では書かれていないため、新発見と見なし今回全てゴシック体の太字にしている。また単行本に再録はされているが、初出紙誌などが不明だった著作もある。これらの初出紙誌発見も新発見とみなした。同年同月同日に発表された著作は、五〇音順に並べた。「※」のついている著作は広告などによって著作名や紙誌が発覚したが、実際にその紙誌を見ることが出来なかったものである。また連載ものの初出紙誌月日の巻号が「？」になっている場合がある。これは連載開始時の巻号は判明したものの、連載終了時の巻号は様々な施設や方法で調査したものの確認出来なかったからである。さらに月日が「？」になっている著作は、八木昇「山手樹一郎年譜」『大衆文学大系 二七』昭和四八（一九七三）年七月、講談社）を参考に発表年、発表誌紙は大体特定出来たものの、実際にその誌紙を見ることが出来なかったものである。また発表年、発表誌紙が全くの不詳の著作は、最後に「発表年・発表誌紙不明作品」としてまとめられている。発表誌紙の出版社も最後にまとめてある。初収本が空欄の著作は、単行本に採録されていないものである。加えて、初収本が、その著作の連載終了より

早く出版されている場合がある。これは連載中に途中までが単行本に収められたという事態がしばしばあった為である。「註」が付いている著作や誌紙は、最後にまとめ註で説明するものである。

12 1	12 1	12 5	大正一四（一九二五）年			大正一一（一九二二）年			大正九（一九二〇）年		大正八（一九一九）年、編集者となる		大正六（一九一七）年		2 10	月 日
オオカミ退治 ※	おしまい!	生まれるまで「註4」	歯ノ才山 ※	ある春のこと	また来る春に	歯ノ才山 ※	ある春のこと	また来る春に	編集室より	銀の鍵「註2」	編集室より	銀の鍵「註2」	編集室より	銀の鍵「註2」	鷗鷗の声「註1」	作品名・書名
井口長二	井口長二	山手樹一郎	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	執筆名
小説	後記	随筆	小説	後記	小説	小説	後記	小説	後記	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
小学画報	少女号	未発表	小学画報	少女号	少女号	小学画報	少女号	少女号	少女号	少女号「註3」	少女号	少女号「註3」	少女号	幼年世界	幼年世界	初出誌・紙名
12 月号	10 ・ 12		4 月号	7 ・ 4	7 ・ 4	4 月号	7 ・ 4	7 ・ 4	5 ・ 2	5 ・ 2	5 ・ 2	5 ・ 2	5 ・ 2	7 ・ 11	7 ・ 11	巻・号
		『山手樹一郎随筆集』H2（1990）12月・光風社														初収本
			大正一三（一九二四）年、東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町一―三三―三）に転居			大正一三（一九二四）年、東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町一―三三―三）に転居			大正一三（一九二四）年、東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町一―三三―三）に転居		大正一三（一九二四）年、東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町一―三三―三）に転居		大正一三（一九二四）年、東京府北豊島郡長崎村字北荒井（現豊島区要町一―三三―三）に転居			

大正一五(一九二六)年															月日
5 1	5 1	5 1	4 1	4 1	4 1	4 1	3 1	3 1	3 1	2 1	2 1	2 1	2 1	2 1	作品名・書名
青いお窓より	丘の上	いたずら	そのころ ※	喧嘩の名人 ※	よい考え	雨の日の少女	又右衛門ノ武勇 ※	凧の話	春の雪	古猫タイジ ※	ロビンソン ※	冬には冬の	雪の日物語(粉雪)〔註5〕	雀のお宿	作品名・書名
井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	執筆名
後記	小説	小説	小説	小説	後記	小説	小説	後記	小説	小説	小説	後記	小説	随筆	種類
少女号	少女号	少女号	少女文芸	小学画報	少女号	少女号	小学画報	少女号	少女号	小学画報	タカラノクニ	少女号	少女号	少女号	初出誌・紙名
11 ・ 5	11 ・ 5	11 ・ 5	4 月 号	11 ・ 4	11 ・ 4	3 月 号	11 ・ 3	11 ・ 3	2 月 号	2 月 号	11 ・ 2	11 ・ 2	11 ・ 2	11 ・ 2	巻・号
														『山手樹一郎随筆集』H2(1990) 12月・光風社	初収本

9 1	7 1	7 1	6 1	6 1	5 1	5 1	4 1	4 1	昭和三(一九二八)年	7 1	1 1	1 1	大正一六(一九二七)年	10 1	10 1	月 日	
西瓜の爆弾	変相お通夜物語	大剣聖荒木又右衛門〔註11〕	二人の理屈屋〔註10〕	新歴史画伝高浪八郎	歴史画伝岩見重太郎	シュークリームのおきめ〔註9〕	スイートホーム探検〔註7〕	滑稽水戸黄門漫遊記		少年水夫〔註6〕	真剣勝負 ※	正月を待つ		強イ百姓 ※	殺生の報い	作品名・書名	
井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二	井口長二		井口長二	井口長二	井口長二		井口長二	井口長二	井口長二	執筆名
小説	小説	小説	小説	伝記	伝記	小説	小説	伝記		伝記	小説	後記		小説	小説	種類	
少女世界	少女世界	少年少女譚海	少女世界	少年少女譚海	少年少女譚海	少女世界	少女世界〔註8〕	少年少女譚海		少年世界	小学画報	少女号		小学画報	少女号	初出誌・紙名	
23 ・ 9	23 ・ 7	9 ・ 7	23 ・ 6	9 ・ 6	9 ・ 5	23 ・ 5	23 ・ 4	9 ・ 4		32 ・ 7 ・ 10	新年号	12 ・ 1		10 月号	11 ・ 10	巻・号	
																初収本	

？	？	？	11	11	9	8	昭和八（一九三三）年	8	5	昭和五（一九三〇）年	12	5	昭和四（一九二九）年	12	11	月			
？	？	？	1	1	1	1		1	1		1	1		1	1	1	1	1	日
外道第一歩	生きて行ける男	矢一筋	「二年余日」が第一回サンデー毎日大衆文芸の選外佳作となる			空撃三勇士「註15」		白子屋お駒「註14」	眞田大助の孝心母を救う		松さんの禁酒「註13」	子供故に春を販ぐ女		又兵衛の山賊退治	孝子渡邊峰山「註12」	作品名・書名			
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	井口長二	井口長二	口井蝶耳	井口長二	井口長二	井口長二	執筆名						
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	伝記	伝記	小説	小説	小説	小説	種類						
大衆文学	大衆文学	大衆文学	サンデー毎日	少年少女譚海	少年少女譚海	少年少女譚海	文芸倶楽部	少年少女譚海	朝日	文芸倶楽部	少年世界	少年世界	初出誌・紙名						
			12	14	14	14	36	11	1	35	34	34	巻・号						
		同光社磯部書房	50	9	8	8	8	5	12	5	12	11							
		『恋討手』S 28 (1953) 6月・	博文館「註17」	『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・									初収本						

12 1	11 1	9 1	4 1	3 5	1 1	昭和一二(一九三七)年	9 1	7 1	6 10	5 1	3 1	昭和一一(一九三六)年	8 19	昭和九(一九三四)年	月 日
さむらい鑑	恋討手	いろ(と)忠義	うぐいす侍「註2」	喧嘩大名銘々伝「註21」	かげろう草紙「註20」		刺青一刀流	辛鼠小僧「註19」	身すぎ恋慕	清水次郎長	飛燕一殺剣「註18」		泣虫康		作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎		執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説		小説		種類
少年少女譚海	サンデー毎日	講談雑誌	サンデー毎日	新青年	少女画報		少年少女譚海	新青年	サンデー毎日	新少年付録	少年少女譚海		サンデー毎日		初出誌・紙名
18 ・ 11	16 ・ 58	24 ・ 9	16 ・ 16	18 ・ 4	？ ？		17 ・ 9	17 ・ 8	15 ・ 29	5 月 号 付 録	17 ・ 3 ？ 5		13 ・ 37		巻・号
	『武将小説名作集』s 15 (1940) 11月・博文館		『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館					『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館			『舞鶴屋お鶴』S 26 (1931) 1月・東方社	初収本			

昭和一三（一九三八）年													月日				
													作品名・書名				
													執筆名				
													種類				
													初出誌・紙名				
													巻・号				
													初収本				
8 5	御意討名月																
7 1	道連れ色珊瑚	山手樹一郎	小説	少年少女譚海	7 ・ 7		『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館										
7 1	紅だすき一刀流〔註25〕	山手樹一郎	小説	講談雑誌	25 ・ 7		『舞鶴屋お鶴』S 26 (1951) 1月・東方社										
7 1	江戸名残り雨	山手樹一郎	小説	奇譚			『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館										
6 1	剣奸暴れ剣法〔註24〕	山手樹一郎	小説	新少年	4 ・ 6 ・ 12												
4 1	艶姿女親分	山手樹一郎	小説	講談雑誌	25 ・ 4												
4 1	辻斬り人魂	山手樹一郎	小説	奇譚													
4 1	元禄片恋い娘〔註23〕	山手樹一郎	小説	日の出	7 ・ 4		『春の虹』S 27 (1952) 8月・同光社磯部書房										
4 1	賭者小町一本勝負※	山手樹一郎	小説	少年少女譚海	19 ・ 4												
3 6	逝く春死化粧	山手樹一郎	小説	新青年	19 ・ 6												
2 1	編集室だより	井口長二	後記	新少年	4 ・ 2												
1 5	赤蛙腹斬り啖呵	山手樹一郎	小説	少年少女譚海	19 ・ 2												
1 1	編集室だより	井口長二	後記	新少年	4 ・ 1												

昭和一四（一九三九）年														月日	
10 1	10 1	7 1	7 1	7 1	6 1	5 1	5 1	3 1	3 1	2 1	2 1	1 5	1 1	1 1	作品名・書名
抜かれ剣客	喰わされ弥太郎	名君修行	道行き忠義	海國日本	果し状由来〔註27〕	靖国の華	念流恋い小町	将棋主従	出世座頭〔註26〕	獅子吼大納言	これつきり無頼	頓馬小姓	忘恩三年	菊花のかきり	執筆名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	種類
小説	小説	小説	小説	絵本	小説	絵本	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	初出誌・紙名
奇譚	講談雑誌	大衆文芸	富士	主婦之友 付録	日の出	主婦之友 付録	講談雑誌	日の出	新少年	新少年	講談雑誌	少年少女譚海	新少年	主婦之友 付録	巻・号
10	26 ・ 10	1 ・ 5	12 ・ 9	7 月号 付録	8 ・ 6	5 月号 付録	26 ・ 5	8 ・ 3	5 ・ 3	5 ・ 2	26 ・ 2	20 ・ 2	5 ・ 1	新年 号 付録	
		『舞鶴屋お鶴』S 26 (1931) 1月・東方社	『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館		『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館			『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館	『生命の灯』S 29 (1934) 6月・和同出版社				『うぐいす侍』S 15 (1940) 1月・博文館		初収本

2 1	1 1	1 1	1 1	昭和一五(一九四〇)年	?	?	?	12 1	12 1	11 5	11 2	11 1	10 5	10 1	月 日	
暴れ姫君	約束	春風街道	供養祝言		劍客八景	丹波路曇り	師走十五日〔註29〕	弥生十四日	侍ごよみ	草笛一刀流	桃太郎侍〔註28〕	侍の道	恋明月	槍さび一代男	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類	
講談雑誌	大衆文芸	科学と国防 譚海〔註30〕	講談倶楽部		?	大衆倶楽部	大衆文学	大衆文芸	新青年	少年少女譚海	岡山合同新聞	日の出	少年少女譚海	講談雑誌	初出誌・紙名	
27 ・ 2	2 ・ 1	21 ・ 1	30 ・ 1					1 ・ 10	20 ・ 16	20 ・ 11	翌年 6 月 30 日	8 ・ 11	20 ・ 10	10 月 増 大 号	巻・号	
『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社	『めおと春秋』S 16 (1941) 10月・博文館			『うぐいす侍』S 26 (1951) 5月・同光社磯部書房		『青春艦隊』S 13 (1938) 8月・パブリ社	『山手樹一郎短編小説全集』S 50 (1973) 2月・桃園書房		『恋討手』S 28 (1953) 6月・同光社磯部書房	S 15 (1940)年10月・合同新聞社 『同年鑑別冊時代小説 桃太郎侍』	同光社磯部書房 『山手樹一郎傑作全集』S 28 (1953) 10月・			『梅の宿』S 27 (1952) 4月・同光社磯部書房	初収本
一〇月をもって博文館を退社し、職業作家へ転身																

？ ？	12 1	12 1	11 1	10 1	10 1	9 1	8 2	7 1	7 1	6 1	5 1	4 1	4 1	4 1	3 1	2 1	月 日
薫風の旅	武士と刀剣	死処	さむらい絵図	彰義隊破る日	品川砲台	頑張り武道〔註31〕	右衛門七恋慕	夜潮	赤槍武士道 ※	まごころ女房	緋牡丹伝法 ※	梅樹	売出し遠山桜	うどん屋剣法	飛燕桜吹雪	藪鶯	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
？	科学と国防 譚海	大衆文芸	講談雑誌	科学と国防 譚海	新青年	日の出	単行本書き下ろし	新青年	科学と国防 譚海	講談雑誌	科学と国防 譚海	大衆文芸	講談雑誌	富士	科学と国防 譚海	新青年	初出誌・紙名
	21 ・ 12	2 ・ 12	27 ・ 12	21 ・ 10	21 ・ 12	9 ・ 9		21 ・ 9	21 ・ 7	27 ・ 6	21 ・ 5	2 ・ 4	27 ・ 4	13 ・ 4	21 ・ 3	21 ・ 3	巻・号
『舞鶴屋お鶴』S 26 (1951) 1月・東方社		『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社			『幕末軍艦役』S 17 (1942) 1月・博文館	『矢一筋』S 35 (1960) 1月・光風社	『義士小説名作集』S 15 (1940) 8月・博文館	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社				『春の虹』S 27 (1952) 8月・同光社磯部書房	『遠山の金さん捕物帳』S 16 (1941) 11月・春陽堂	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房		『舞鶴屋お鶴』S 26 (1951) 1月・東方社	初収本

昭和一六（一九四二）年													月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初収本
7 15	牛若丸	山手樹一郎	伝記	単行本書き下ろし									1 12	戊辰進軍譜〔註32〕	山手樹一郎	小説	少年倶楽部	28 ・ 1 ・ 12	『錦の旗風』S 29 (1934) 8月・ポプラ社
7 15	伊藤博文	山手樹一郎	伝記	単行本書き下ろし									1 1	戊辰脱走記	山手樹一郎	小説	新青年	22 ・ 1 ・ 1	『遠山の金さん捕物帳』S 16 (1941) 11月・春陽堂
7 15	一休和尚	山手樹一郎	伝記	単行本書き下ろし									1 1	維新夜話 ※	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 2 ・ 2	『説切傑作スバイ捕物帖』S 16 (1941) 5月・今日の問題社
7 15	阿部正弘	山手樹一郎	伝記	単行本書き下ろし									1 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸	3 ・ 3 ・ 3	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
7 1	梅雨晴れ	山手樹一郎	小説	大衆文芸									1 1	腕一本の春	山手樹一郎	小説	新青年	22 ・ 7 ・ 7	『幕末軍艦役』S 17 (1942) 1月・博文館
7 1	泥人形	山手樹一郎	小説	サンデー毎日									6 10	土の花嫁	山手樹一郎	小説	講談雑誌	28 ・ 5 ・ 5	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
5 1	五月雨供養	山手樹一郎	小説	富士									5 1	鴛鴦春秋	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 4 ・ 4	『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社
4 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸									3 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	3 ・ 3 ・ 3	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
3 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸									2 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 2 ・ 2	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
2 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸									1 12	無名戦士	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 2 ・ 2	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
1 12	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸									1 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 2 ・ 2	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社
1 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	大衆文芸									1 1	無名戦士	山手樹一郎	小説	科学と国防 譚海	22 ・ 2 ・ 2	『無名戦士』S 16 (1941) 11月・新小説社

8 1	8 1	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	7 15	月 日
鉄舟とその妻	伊能忠敬	立派な人々の話	元就ノ子供	松平長四郎	日吉丸	橋本左内	乃木希典	二宮金次郎	名和長年	中江藤樹	徳川光圀	曾我兄弟	菅原道真	楠木正行	勝海舟		作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	伝記	種類
講談雑誌	科学と国防 譚海	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	初出誌・紙名
8 月号	22 ・ 8																巻・号
『天の火』S 18 (1943) 12月・新泉社	『天の火』S 18 (1943) 12月・新泉社	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	『国民絵本日本ノ子供』S 16 (1941) 7月・博文館	初収本

6 1	5 1	3 1	3 1	3 1	1 1	昭和一七（一九四二）年	？ ？	12 1	11 1	10 1	10 1	10 1	9 1	8 1	月 日
大納言風	梨枝夫人	余香抄「註35」	密使合戦	信濃の春	暁の雪		家出ざくら	感激の江田島「註34」	坦庵と秋帆	幕末軍艦役「註33」	高島秋帆	愚直登用	江川太郎左衛門	敗走の夜	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説		小説	隨筆	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
家の光	新青年	大衆文芸	講談雑誌	新青年	新青年		講談雑誌	講談雑誌	科学と国防 譚海	新青年	科学と国防 譚海	講談倶楽部	科学と国防 譚海	講談倶楽部	初出誌・紙名
18 ・ 6	23 ・ 5	4 ・ 3	3 月 号	23 ・ 3	23 ・ 1		27 ・ ？	12 月 号	22 ・ 11	22 ・ 10	22 ・ 10	31 ・ 10	22 ・ 9	31 ・ 8	巻・号
	『舞鶴屋お鶴』S26(1951)1月・東方社	『恋討手』S28(1953)6月・同光社磯部書房	『十六夜巷談』S25(1950)10月・同光社磯部書房	同光社磯部書房	『山手樹一郎傑作全集』S28(1953)10月・			『高野長英』S18(1943)6月・春江堂	『幕末軍艦役』S17(1942)1月・博文館					初収本	

2 1	2 1	1 1	1 1	昭和一八（一九四三）年	?	12	11	10	9	9	8	7	7	7	月 日
夜明の唄	文久の秋	羽織	江戸追放		東征序曲〔註38〕	十四日の朝	競争者〔註37〕	流れ雲		道連れ天狗	薩摩武士	勝鬨武士〔註36〕	輝く海軍の父	赤穂日記	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
講談雑誌	講談倶楽部	大衆文芸	新青年		北海道新聞	科学と国防 譚海	科学と国防 譚海	新青年		講談雑誌	新青年	講談雑誌	科学と国防 譚海	大衆文芸	初出誌・紙名
2 月 号	33 ・ 2	5 ・ 1	24 ・ 1			23 ・ 12	23 ・ 11	23 ・ 10		9 月 号	23 ・ 8	7 月 号	23 ・ 7	4 ・ 7 ・ 12 ?	巻・号
	『紅梅峠』S 29 (1954) 7月・桃源社		『貞女』S 27 (1953) 9月・同光社磯部書房		『恋天狗』S 28 (1953) 1月・同光社磯部書房		『高野長英』S 18 (1943) 6月・春江堂	『うぐいす侍』S 26 (1951) 5月・同光社磯部書房			同光社磯部書房	同光社磯部書房	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『赤穂日記』S 19 (1944) 12月・泰光堂	初収本

「余香抄」が第一五回直木賞の候補作となる

3 1	2 1	昭和一九(一九四)年	12 1	12 1	11 1	10 1	9 1	8 1	7 1	7 1	6 1	5 1	5 1	4 1	3 1	月 日	
鯛	花嫁太平記		薩英戦争	桑名入城	寺田屋事件	青い空	御殿山焼打	吹雪く桜田門	幕末海軍の創生〔註41〕	獄中記〔註40〕	天の火	三月十日	男の槍〔註39〕	密航手順	銀の虎	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	口絵	小説	小説	隨筆	小説	小説	小説	種類
新青年	日の出		科学と国防 譚海	日の出	科学と国防 譚海	新青年	科学と国防 譚海	科学と国防 譚海	科学と国防 譚海	科学と国防 譚海	大衆文芸	新青年	大衆文芸	講談雑誌	科学と国防 譚海	講談雑誌	初出誌・紙名
25 ・ 3	13 ・ 2		24 ・ 12	12 ・ 12	24 ・ 11	24 ・ 10	24 ・ 9	24 ・ 8	24 ・ 7	5 ・ 7 ・ 12	24 ・ 6	5 ・ 5	5 月 号	24 ・ 4	30 ・ 3	卷・号	
	『貞女』S 27 (1952) 9月・同光社磯部書房			春陽堂 『山手樹一郎短編時代小説全集五』S 55 (1980) 7月・							『崑山と長英』S 20 (1945) 1月・北光書房	『天の火』S 18 (1943) 12月・新泉社		『天の火』S 18 (1943) 12月・新泉社	『天の火』S 18 (1943) 12月・新泉社		初収本

6 1	1 1	昭和二一（一九四六）年	11 1	10 1	9 18	2 1	12 17	12 1	9 1	8 1	6 1	6 1	4 1	4 1	月 日	
緑陰放談輯	群盲		水盃	ざんぎり	明治元年〔註44〕	錢別		倅		別盃		蟄居記〔註43〕	志士の道	檻送記〔註42〕	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎		山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
座談会	小説		小説	小説	小説	小説		小説		小説		小説	小説	小説	種類	
大衆文芸	大衆文芸		漫画日本増刊	大衆文芸	中部日本新聞	新青年		富士		新青年		大衆文芸	日の出	大衆文芸	初出誌・紙名	
8 ・ 6	8 ・ 1		40 ・ 5	7 ・ 4	？ 12 月 8 日	26 ・ 2		19 ・ 12		25 ・ 7		6 ・ 6 ？ 10	13 ・ 4	6 ・ 4 ？ 5	巻・号	
	『生命の灯』S 29（1954）6月・和同出版社			『山手樹一郎短編時代小説全集』S 55（1980）7月・春陽堂	『ぼんくら与力』S 28（1953）1月・東京文芸社			『十六夜巷談』S 25（1950）10月・同光社磯部書房				『崑山と長英』S 20（1945）1月・北光書房		『崑山と長英』S 20（1945）1月・北光書房	初収本	
昭和二〇（一九四五）年																
「獄中記」、「檻送記」、「蟄居記」の三作が第四回野間文芸奨励賞を受賞																
「檻送記」が第一九回直木賞の候補作となる																
「獄中記」が第一回歴史文学賞の候補作となる																

3 3	2 1	1 1	1 1	昭和二三（一九四八）年	9 1	7 25	1 1	3 1	2 1	1 1	昭和二三（一九四七）年	?	11 1	7 1	月 日
女菩薩	夢介千両みやげ〔註45〕	名奉行伝	恋の酒		初恋の女	梅の香	おいらん傳	春の雪	万年青は告げる	地獄ごよみ		産衣	明日の風	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説		小説	小説	種類	
新読物	読物と講談	読物と講談	講談雑誌		読物と講談	新読物	ホープ	新読物	読物と講談	地方紙数紙		新読物	講談雑誌	初出誌・紙名	
3 ・ 3	3 ・ 2 ・ ?	3 ・ 1	34 ・ 1		2 ・ 9	2 ・ 5	2 ・ 3	2 ・ 2	2 ・ 1			1 ・ 3	32 ・ 6	巻・号	
『うぐいす侍』S 26（1951）5月・同光社磯部書房	『新大衆小説全集 六』S 25（1950）1月・矢貴書店		『江戸情話』S 25（1950）8月・東方社		『貞女』S 27（1952）9月・同光社磯部書房		『おいらん傳』S 24（1949）2月・矢貴書店	『壁すがた』S 29（1954）4月・桃源社	『新大衆小説全集 六』S 25（1950）1月・矢貴書店	『新大衆小説全集 六』S 25（1950）1月・矢貴書店			『女のおそおい』S 26（1951）9月・東方社	初収本	

10 1	9 15	9 1	9 1	7 15	7 13	7 1	7 1	7 1	7 1	7 1	6 1	5 1	5 1	4 1	3 1	月 日
花魁やくざ	女のよそおい	お女房さま	お染小僧	旗本の娘	鬼姫しぐれ〔注4〕	万年青の秘密	春ふたたび	恋慕酒	おせん	花の雨	女郎蜘蛛	金さんと女難	青春行路	金さんと岡つ引	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
クラブ	講談世界	新青年	別冊 富士	大衆小説界	夕刊とうほく	傑作倶楽部	キング	オール読物	新読物	大衆文芸	新青年	小説の泉	読切講談	小説の泉	初出誌・紙名	
3 ・ 9	1 ・ 2	29 ・ 6	9 月 号	2 ・ 7	12 月 25 日		24 ・ 7	1 ・ 4	3 ・ 7	10 ・ 6	29 ・ 4	5		3	巻・号	
『花魁やくざ』S 26 (1951) 7月・東方社	『女のよそおい』S 26 (1951) 9月・東方社	『舞鶴屋お鶴』S 26 (1951) 1月・東方社			同光社磯部書房 『鬼姫しぐれ』S 24 (1949) 2月・同光社磯部書房	『大家花形全部傑作捕物帖』S 23 (1948) 11月・湊書房	同光社磯部書房 『春ふたたび』S 27 (1952) 5月・同光社磯部書房	『土の花嫁』S 27 (1952) 7月・同光社磯部書房	『おせん』S 27 (1952) 5月・同光社磯部書房	『梅の宿』S 27 (1952) 4月・同光社磯部書房	同光社磯部書房 『春ふたたび』S 27 (1952) 5月・同光社磯部書房	『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・矢貴書店	同光社磯部書房 『めおと八景』S 27 (1952) 12月・同光社磯部書房	『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・矢貴書店	初収本	

12 1	12 1	12 1	12 1	11 1	11 20	11 1	11 1	11 1	11 1	11 1	11 1	10 25	10 1	10 1	10 1	月 日
侍かたぎ	恋がたぎ	男というもの	一平浮世はなし	幕末娘気質	遠山金さん刺青桜	夕立小町	女役者	お姫さま妻	おのろけ武道記	お国流皆伝	密使の恋	水戸光圀	花嫁の村	月に濡れる女	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類	
モダン日本	新読物	ルビー	読切読物	時代読切傑作集	講談の泉	大衆雑誌	サロン	富士	人情講談	講談雑誌	時代読切傑作集	読物の泉	大衆小説	新青年	初出誌・紙名	
19 ・ 12	3 ・ 12	1 ・ 2	1 ・ 12 ・ 2 ・ 4	第 2 集	1	1 ・ 2	3 ・ 11	1 ・ 10	創 刊 号	34 ・ 7	第 1 集	2 ・ 5	1 ・ 1	29 ・ 7	巻・号	
『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社	『うぐいす侍』S 26 (1951) 4月・同光社磯部書房				『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・矢貴書店					『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房				同光社磯部書房	『山手樹一郎傑作全集』S 28 (1953) 10月・	初収本

1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	昭和二四（一九四九）年	？ ？	12 20	12 1	12 1	12 1	12 1	12 1	月 日
若様行状記	雪あかり	村一番の男	みちゆき峠	春の潮	枯葦		五十両の夢	金さんと拗ね小町	花嫁位牌	狙われ小町	貞女さんげ	艶聞土かつぎ記	新編 八犬伝	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	覆面作家「註47」	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
新読物	読物と漫画	大衆小説	人情講談	読切小説特集	実話と講談		実話と読物	講談の泉	読物の泉	講談と娯楽	月刊中国	新文庫	講談倶楽部	初出誌・紙名
1 ゝ 6 月 号	新 年 増 大 号	2 ・ 1	2 ・ 1	2 ・ 2	2 ・ 1			2	2 ・ 6	1 ・ 1	3 ・ 12	2 ・ 9	？ 3 年 後 9 月 1 日	巻・号
							同光社磯部書房	『梅の宿』S 27 (1952) 4月・ 矢貴書店	『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・			『女のよそおい』S 26 (1951) 9月・東方社	講談社	『新編 八犬伝 上下』S 26 (1951) 10月・ 初収本

6 1	5 30	5 25	5 1	5 1	5 1	4 1	3 30	3 1	3 1	2 1	2 1	2 1	2 1	2 1	2 1	月 日
おのろけ供養	めおと春秋	柳橋お仙の恋	めおと雪	鶯のぼんくら松	さみだれの女	恋ぞめ頭巾	恋の芽	死損い記	五彩の情火	美少年散華非聞	花笠浪人	素浪人日記	久楽屋の娘	恩愛一刀流	江戸の文	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎他	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
読切講談世界	近代ロマン	読物と講談 別冊	キング	読切読物	面白倶楽部	読物と漫画	読切小説集	大衆文芸	小説の泉	大衆雑誌	花馬車	新青年	時代読切傑作集	少年少女讀海	月刊読売	初出誌・紙名
2 ・ 6	2 ・ 2	大 快 作 特 選 集	25 ・ 5	2 ・ 5 ・ 3 ・ 11	2 ・ 5	4 ・ 9 月 号	第 3 集	11 ・ 3	5	2 ・ 2	2 月 号	30 ・ 2	第 4 集	2 ・ 2	7 ・ 2	巻・号
	同光社磯部書房 『うぐいす侍』S 26 (1951) 5月・	『花魁やくざ』S 26 (1951) 7月・東方社	『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社	図書出版社 『鶯のぼんくら松』S 26 (1951) 2月・文芸							同光社磯部書房 『花笠浪太郎』S 27 (1952) 2月・	東方社 『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・	『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社		『山手樹一郎短編小説全集 四』S 50 (1975) 10月・桃園書房	初収本

1 20	1 20	1 1	昭和二五（一九五〇）年	12 1	11 20	10 1	8 1	8 1	7 15	7 8	7 5	7 5	7 1	7 1	7 1	月 日
解説	哀恋柿つぶて	人情長屋		強情主従	青い月影	きつね美女	兵助夫婦	美女峠〔註4〕	女の盃	夕立の女	牢獄の鬼	出流天狗	恋慕街道	遠山の金さん〔註4〕	千両小町	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
単行本書き下ろし	別冊 読物と講談	四国春秋		任侠講談	傑作読切集	ホープ	大衆文芸	夕刊とうほく	読切講談世界	小説の泉	時代読切傑作集	傑作読切	人情講談	講談の泉	読切読物	初出誌・紙名
	5 ・ 1	5 ・ 1		1 ・ 1	第 2 集	4 ・ 10	11 ・ 8	？ 12 月 27 日	2 ・ 8	7	第 7 集	2 ・ 5	2 ・ 8 ？ ？	3	2 ・ 8	巻・号
矢貴書店	『新大衆小説全集 第九卷』S 25 (1950) 1月・					『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社	『美女峠』S 25 (1950) 9月・同光社磯部書房		『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社			『恋慕街道』S 26 (1951) 6月・文芸図書出版	『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・矢貴書店	『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社	初収本

12 1	12 1	11 1	9 10	7 1	7 1	6 20	6 1	6 1	6 1	6 1	5 1	4 10	2 1	月 日
十六文からす堂	恋名月	舞鶴屋お鶴	うなされる女	金さん捕物帖	蛙の子	又士郎笠〔註50〕	むすめ伝法	むすめ剣法	つがい鷗	さくら月夜	夜の花道	豆腐屋剣法	淡雪	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
小説の泉	小説倶楽部	講談雑誌	別冊サンデー毎日	キング	小説倶楽部	夕刊とうほく	講談の泉	小説倶楽部	面白倶楽部	講談雑誌	キング	講談倶楽部	講談時事	初出誌・紙名
12 く ?	21 ・ 16	36 ・ 11 ? 12	秋の大衆文芸	26 ・ 7 ? 27 ・ 6	21 ・ 9	? 1 月 16 日	6 ? 7	花形 作家 傑作 小説 特大 号	3 ・ 6	40 ・ 6	26 ・ 5	春の 臨時 増刊	2	巻・号
『十六文からす堂』S 26 (1951) 8月・文芸図書出版社	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『舞鶴屋お鶴』S 26 (1951) 1月・東方社	『うなされる女』S 49 (1974) 12月・広済堂	『新大衆小説全集 六』S 25 (1950) 1月・矢貴書店	『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社	『又四郎笠』S 26 (1951) 7月・同光社磯部書房	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房		『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『江戸情話』S 25 (1950) 8月・東方社			初収本

10 1	9 1	7 1	7 1	7 1	5 1	5 1	3 1	3 1	2 10	2 1	1 1	1 1	昭和二六（一九五二）年	月 日
美女を射る	お荷物女房	愉しからずや恋	春雷	木枯しの関	江戸の田子作	江戸の闇	花嫁をんな大学	恋つぶて浪人旅	おはぐる恋慕	武士魂は白雪の如く	おとめ街道	青空浪人		作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説		種類
実話と譚談	面白倶楽部	読切小説倶楽部	面白倶楽部	オール読物	読切小説倶楽部	読切小説集	読切傑作小説	読切小説倶楽部	読切ロマンス	花形譚談	少女クラブ	家の光		初出誌・紙名
4 ・ 10	4 ・ 9	4 ・ 5 ・ ?	4 ・ 7	6 ・ 7	5	6 ・ 5	臨時増刊号	3	新春特別号	4 ・ 2	29 ・ 1 ・ 30 ・ 3	27 ・ 1 ・ 28 ・ 12		巻・号
	『おせん』S 27 (1952) 5月・同光社磯部書房	『愉しからずや万作』S 27 (1952) 8月・東方社	『おせん』S 27 (1952) 5月・同光社磯部書房	『女のよそおい』S 26 (1951) 9月・東方社							『おとめ街道』S 27 (1952) 5月・講談社	『青空浪人』S 29 (1954) 7月・同光社磯部書房		初収本

5 1	5 1	4 15	4 6	2 1	1 1	1 1	1 1	1 1	昭和二七（一九五二）年	？ ？	？ ？	11 1	11 1	10 23	月 日
やん八弁天	女ひとりの家	死神	浪人横丁	梅の宿	浪人まつり	夫婦八景	紅梅行燈	江戸少年隊		梅の雨	天狗くずれ	恋慕ぐるま	女冥利	はだか大名	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	小説	小説	種類
オール読物	にっぽん読切小説読物	別冊小説新潮	週刊サンケイ	キング	講談倶楽部	主婦と生活	平凡	少年クラブ		？	読物街	読切読物	にっぽん読切小説読物	時事新報	初出誌・紙名
7 ・ 5	傑 作 特 大 号	4 ・ 2	？ 10 月 12 日 号	28 ・ 2	新 年 特 別 増 大 号	1 ？ 12	？ 11 月 5 日	39 ・ 1 ？ 14		11 月 号 ？	14 ・ 12	？ 翌 年 7 月 14 日	卷 ・ 号		
『時代小説代表選集』S 27 (1952) 11月・湊書房		『土の花嫁』S 27 (1952) 7月・同光社磯部書房	『浪人横丁』S 27 (1952) 10月・文芸図書出版社	『梅の宿』S 27 (1952) 4月・同光社磯部書房	『めおと雪』S 27 (1952) 10月・同光社磯部書房	『めおと八景』S 27 (1952) 12月・同光社磯部書房	『紅梅行燈』S 27 (1952) 12月・湊書房			『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社	『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社			『はだか大名』S 27 (1952) 11月・講談社	初収本

1	1	1	昭和二八(一九五三)年	12	12	11	10	10	10	9	9	8	6	6	月
1	1	1		1	1	1	1	1	1	5	1	14	20	15	日
青春道場	いろは剣法	姉御ざくら		夜霧の激情	万作青春記	江戸屋敷の決闘	道中・路銀・手形	お千代茶屋	朝霧峠	貞女	紫忠兵衛	朝焼け富士	ぼんくら天狗	柔	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説		小説	小説	小説	隨筆	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
家の光	実話と講談	読切小説集		にっぽん読切小説読物	小説倶楽部	りべらる	旅	評判倶楽部	明星	週刊朝日	講談雑誌	都新聞	夕刊河北	富士	初出誌・紙名
29	6	5		12	12	7	10	10	1	新	38	?	?	5	卷・号
・	・	・		・	・	・	・	・	・	秋	・	翌	翌	・	
1	1	2		8	月号	14	月号	月号	1	物	9	年	11	8	
?	?	?							2	号	39	5	月		
14	9	?						5		9	月	27			
『青春道場』S 29 (1954) 1月・桃源社	同光社磯部書房 『いろは剣法』S 28 (1953) 11月・	『青春道場』S 29 (1954) 1月・桃源社		『万作罷り帰る』S 28 (1953) 2月・東方社				『朝霧峠』S 28 (1953) 8月・東京文芸社		『貞女』S 27 (1952) 9月・同光社磯部書房	『紫忠兵衛』S 29 (1954) 2月・豊文社	『朝焼け富士 上下』S 28 (1953) 9月・北辰堂	『ぼんくら天狗』S 27 (1952) 12月・文芸図書出版社	『生命の灯』S 29 (1954) 6月・和同出版社	初収本

2 1	2 1	1 1	1 1	昭和二九（一九五四）年	？ ？	10 1	10 1	10 1	9 1	9 1	8 24	8 1	4 1	1 1	1 1	1 1	月 日
壁すがた	江戸道中日記	細井廣澤と安兵衛	山陽の妻		たゆまぬ努力	浪人安兵衛	春駒街道	巷説荒木又右衛門	ぼんくら千両	月の路地	鉄火奉行	おぼろ月	若殿天狗	むすめ月夜〔註52〕	風雲修羅城	野ざらし姫〔註51〕	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説		序文	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
講談倶楽部	傑作倶楽部	実話と講談	小説の泉		単行本書き下ろし	実話と講談	講談雑誌	キング	小説倶楽部	キング	毎日新聞	オール読物	少女クラブ	面白倶楽部	太陽少年	講談倶楽部	初出誌・紙名
2 月 特 別 号	2	7 ・ 1	1		6 ・ 10 ・ 12	39 ・ 10	29 ・ 12 ・ 31 ・ 11	6 ・ 9	29 ・ 11	翌 年 2 月 28 日	8 ・ 8	31 ・ 5 ・ 32 ・ 4	6 ・ 1	新 年 号	・ 12 月 号	・ 号	巻・号
『壁すがた』S 29（1954）4月・桃源社					『集治監悲歌』S 53（1978）5月・光潮社			『巷説荒木又右衛門』S 30（1955）7月・講談社	『ぼんくら千両』S 30（1955）9月・和同出版社	『生命の灯』S 29（1954）6月・和同出版社	『鉄火奉行』S 29（1954）4月・毎日新聞社	『生命の灯』S 29（1954）6月・和同出版社	『若殿天狗』S 29（1954）10月・ポプラ社	『紅だすき無頼』S 35（1960）1月・大和出版		『野ざらし姫』S 29（1954）1月・講談社	初収本

？ ？	12 1	11 1	10 10	9 1	9 1	7 17	6 1	6 1	5 1	5 1	4 1	3 14	3 10	2 1	2 1	月 日
恋染め笠	雪の駕籠	木枯しの旅	おぶい紐	鮎とスッポンの話	青空剣法	江戸の虹	妻と子	宿場女郎	夜鷹	藤棚の女	春秋あばれ獅子	和蘭囃子	生命の灯	素浪人日和	木の香 肌の香	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	隨筆	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
地方紙数紙	主婦の友	オール読物	サンデー毎日	講談雑誌	講談倶楽部	産経新聞	読切小説倶楽部	小説の泉	オール読物	傑作倶楽部	面白倶楽部	サンデー毎日	サンデー毎日	実話と講談	講談雑誌	初出誌・紙名
	38 ・ 12	9 ・ 11	33 ・ 49	40 ・ 9	翌 3 年後 12 月 1 日	翌 年 5 月 20 日	6 6	6 6	9 ・ 5	5 5	7 ・ 4 翌 8 ・ 5	33 ・ 13 翌 29	33 ・ 11	7 ・ 2 翌 11	40 ・ 2	巻・号
同光社書房	『恋染め笠 上下』S 30 (1955) 10月・和同出版社	『山手樹一郎新編作品集第一』S 31 (1956) 3月・9月・春陽堂	『山手樹一郎短編時代小説全集 九』S 55 (1980)		『青空剣法』S 31 (1956) 6月・講談社	『江戸の虹 上下』S 30 (1955) 10月・講談社			『紅梅峠』S 29 (1954) 7月・桃源社		『春秋あばれ獅子』S 30 (1955) 3月・桃源社	『和蘭囃子』S 29 (1954) 7月・毎日新聞社	『生命の灯』S 29 (1954) 6月・和同出版社	『素浪人日和』S 30 (1955) 2月・土曜文庫		初収本

昭和三〇（一九五五）年													月日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初収本
8 20	8 20	8 1	7 25	7 20	7 15	7 5	6 20	5 20	5 1	4 15	1 1	1 1	江戸群盗記	山手樹一郎	小説	週刊東京	1 ・ 1 ・ 2 ・ 48	『江戸群盗記』S 31 (1955) 10月・新潮社 和同出版	
	あとがき	青年安兵衛	あとがき	朝寝坊と晩酌の記	槍一筋	塩原の民謡詩人	あとがき	後記 めくら蛇の記	財布の命	夜馬車〔註53〕	花嫁土俵	紅顔夜叉	山手樹一郎	山手樹一郎	小説	面白倶楽部	9 ・ 1 ・ 10 ・ 13	『紅顔夜叉』S 32 (1957) 12月・光文社	
	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	小説	別冊小説新潮	9 ・ 10	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	
	後記	小説	後記	後記	小説	序文	後記	後記	小説	小説	小説	小説	山手樹一郎	山手樹一郎	小説	別冊小説新潮	2	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 6月・和同出版	
	全集書き下ろし	平凡	単行本書き下ろし	全集書き下ろし	別冊小説新潮	単行本書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	オール読物	別冊小説新潮	小説サロン	面白倶楽部	山手樹一郎	山手樹一郎	小説	別冊小説新潮	10 ・ 5	『財布の命』S 35 (1960) 3月・光風社 東京芸芸社	
	1 ・ 1 ・ 2 ・ 48	翌年12月		3	9 ・ 10		2	1	10 ・ 5	9 ・ 6	創刊号		山手樹一郎	山手樹一郎	小説	別冊小説新潮	9 ・ 6	『代表作時代小説』S 30 (1955) 10月・東京芸芸社	
	『江戸群盗記』S 31 (1955) 10月・新潮社 和同出版	『山手樹一郎篇小説全集四』S 30 (1955) 8月・和同出版	『青年安兵衛』S 31 (1956) 12月・平凡社	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『槍一筋』S 31 (1956) 1月・和同出版社	『孟蘭盆夜話』S 30 (1955) 7月・新小説社	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 6月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集一』S 30 (1955) 5月・和同出版	『財布の命』S 35 (1960) 3月・光風社 東京芸芸社	『代表作時代小説』S 30 (1955) 10月・東京芸芸社		『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版	『山手樹一郎篇小説全集二』S 30 (1955) 7月・和同出版

1 1		?	12 17	12 10	12 1	12 1	12 1	11 1	10 20	10 15	10 10	10 1	9 20	月 日
青春峠〔註5〕		変化大名	青雲の鬼	道場小町	どんな…	借りた蚊帳	江戸ざくら	巷説水戸黄門	あとがき	唐人一揆	「夜馬車」について	念流中興の剣豪〔註54〕	あとがき	作品名・書名
山手樹一郎	昭和三一 (一九五六)年	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説		小説	小説	小説	後記	小説	小説	小説	後記	小説	後記	小説	後記	種類
小説サロン		地方紙教紙	朝日新聞	小説春秋	小説サロン	オール読物	小説倶楽部	キング	全集書き下ろし	別冊小説新潮	単行本書き下ろし	小説新潮	全集書き下ろし	初出誌・紙名
33 年 8 月 1 日		翌 年 6 月 20 日	炉 辺 号	12 月 号	10 ・ 12	8 ・ 12	31 ・ 13	9 ・ 14	9 ・ 13	9 ・ 14	9 ・ 13	9 ・ 13	5	巻・号
『現代長編小説全集一九』S 34 (1959) 2月・講談社		『変化大名 上下』S 30 (1955) 8月・講談社	『青雲の鬼』S 31 (1956) 6月・朝日新聞社	『柳橋お仙』S 35 (1960) 2月・同人社	『柳橋お仙』S 32 (1957) 4月・和同出版社		『巷説水戸黄門』S 32 (1957) 4月・講談社		『山手樹一郎篇小説全集六』S 30 (1955) 10月・和同出版	『戸塚の夜雨』S 37 (1962) 9月・光風社	『昭和三〇年度版 時代小説』S 30 (1955) 10月・東京文芸社	『念流中興の人々』S 35 (1960) 1月・光風社	『山手樹一郎小説全集五』S 30 (1955) 9月・和同出版	初収本

2 ?	1 1	1 1	昭和三二（一九五七）年	?	?	10 25	9 21	9 1	7 10	5 1	4 10	2 1	月 日
父のながい	晩酌の味	遠山政談		新妻	大名囃子	「三郎兵衛の恋」について	のっそりと参上	霧の中	呪われた花嫁	若殿ばんざい	一色左近	三郎兵衛の恋〔註56〕	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
序文	随筆	小説		小説	小説	後記	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
単行本書き下ろし	中央公論	小説倶楽部		産経新聞	地方紙数紙	単行本書き下ろし	旬刊ラジオ	オール読物	小説倶楽部	家の光	小説と読物	小説公園	初出誌・紙名
	1 月号	10 ・ 1 ・ 11 ・ 7					・ 12 月 21 日	11 ・ 9	夏 の 大 増 刊	32 ・ 5 ・ 33 ・ 6	春 の 傑 作 小 説 集	7 ・ 2	巻・号
『歌集 西日』S 32 (1957) 3月・桃源社				『壁すがた』S 29 (1954) 4月・桃源社	『大名囃子』S 32 (1957) 9月・東京文芸社	『昭和三二年度版 時代小説』S 31 (1956) 10月・東京文芸社	桃源社 『のっそりと参上』S 32 (1957) 4月・	『土こね記』S 34 (1959) 2月・桃源社		『若殿ばんざい』S 32 (1957) 6月・桃源社		『代表作時代小説』S 31 (1956) 10月・東京文芸社	初収本

1 1	1 1	1 1	1 1	昭和三三(一九五八)年	?	?	?	12 10	9 30	9 18	8 1	7 1	4 1	3 1	月 日	
わんぱく公子	藤の茶屋	土こね記	江戸の朝風		朝晴れ鷹	春待月	秋しぐれ	幕末の北朝輪王寺宮の悲劇	作者のことば	浪人八景	女房というもの	女の城	筑医者	花の青空	作品名・書名	
山手樹一	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説		小説	小説	小説	伝記	後記	小説	小説	小説	小説	小説	種類	
面白倶楽部	別冊大衆小説	オール読物	講談倶楽部		三社連合紙	産経新聞	週刊サンケイ別冊	特集人物往来	単行本書き下ろし	産経時事	小説新潮	小説と読物	週刊朝日別冊	平凡	初出誌・紙名	
11 ・ 1 ゝ 13 ・ 13	3 ・ 1	13 ・ 1	翌々 年 12 月 1 日					12 月 号		翌 年 7 月 20 日		11 ・ 11	7 月 特 大 号 ゝ ?	傑 作 時 代 小 説 集	翌 年 3 月 1 日	巻・号
『わんぱく公子』S 34 (1959) 1月・光文社	『拾った女房』S 37 (1962) 5月・光風社	『代表作時代小説』S 33 (1958) 10月・東京文芸社	『江戸の朝風 上下』S 35 (1960) 12月・講談社		『朝晴れ鷹』S 33 (1958) 4月・新潮社	『春待月』S 32 (1957) 5月・和同出版社	『土こね記』S 34 (1959) 2月・桃源社		『代表作時代小説』S 32 (1957) 9月・東京文芸社	『浪人八景 上下』S 33 (1958) 8月・桃源社		『土こね記』S 34 (1959) 2月・桃源社	『女人の砦』S 32 (1957) 2月・新潮社	『代表作時代小説』S 32 (1957) 10月・東京文芸社	『花の青空』S 33 (1958) 2月・和同出版社	初収本

8 1	6 1	2 1	2 1	1 10	昭和三四（一九五九）年	？ ？	？ ？	11 1	10 20	10 10	9 1	8 1	7 10	4 20	4 15	月 日	
戸塚の夜雨	道中・豊助・役者のこと〔註57〕	五十両騒動	尺八乞食	大島圭介脱走記		少年の虹	江戸に出た若殿	江戸花火	浪人市場	辻斬り未遂	作者のことば	微禄お長屋	柳生流秘太刀	天保紅小判	花魁仁義	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	隨筆	小説	小説	伝記		小説	小説	小説	小説	小説	後記	小説	小説	小説	小説	種類	
オール読物	旅	オール読物	週刊朝日別冊	特集人物往来		朝日ジュニア版	地方紙	家の光	週刊大衆	サンデー毎日特別号	単行本書き下ろし	オール読物	小説倶楽部	週刊読売	特集 大衆小説	初出誌・紙名	
14 ・ 8	6 月 号	14 ・ 2	時代 小説 傑 作 号	1 月 号				34 ・ 11 ・ 35 ・ 11	？ 翌 年 4 月 9 日		22		13 ・ 8	11 ・ 8	？ 翌 年 5 月 3 日	2 ・ 2	巻・号
東京文芸社	『代表作時代小説』S35（1960）10月・	『土こね記』S34（1959）2月・桃源社	東京文芸社	『代表作時代小説』S34（1959）10月・		『少年の虹』S34（1959）1月・東都書房		『江戸花火』S34（1959）11月・光風社	講談社	『浪人市場 一く八』S39（1964）10月・	『土こね記』S34（1959）2月・桃源社	東京文芸社	『代表作時代小説』S33（1958）9月・	『土こね記』S34（1959）2月・桃源社	『天保紅小判 上下』S34（1959）5月・桃源社		初収本

10 1	9 15	9 15	9 1	8 15	8 10	7 1	5 5	4 1	2 10	1 10	1 1	昭和三五 (一九六〇)年	?	9 10	8 15	月 日		
あのこと(二)のこと(二)	山手樹一郎略年譜	畏友山本周五郎へ	あのこと(二)のこと(二)	作者のことば	皆伝行安	隠密返上	鶴姫やくざ帖	花のお江戸で	狼谷の血闘	拾った女房	天保浮世硯			八幡鳩九郎	香代おぼえ書	作者のことば	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎			山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
随筆	年譜	随筆	随筆	後記	小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説			小説	小説	後記	種類	
全集書き下ろし	時代傑作小説	時代傑作小説	全集書き下ろし	単行本書き下ろし	小説倶楽部	週刊朝日 別冊	平凡	小説倶楽部	小説倶楽部	サンデー毎日特別号	オール読物			東京タイムズ	サンデー毎日特別号	単行本書き下ろし	初出誌・紙名	
2	夏の臨時増刊号	夏の臨時増刊号	1		13・11	緑陰特別号	16・5・17・6	13・5・14・15	13・3	47	15・1・10			32			巻・号	
『山手樹一郎全集付録』S 35 (1960) 10月・講談社		『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社	『山手樹一郎全集付録』S 35 (1960) 9月・講談社	『代表作時代小説』S 35 (1960) 8月・東京文芸社		『尺八乞食』S 35 (1960) 6月・光風社	『鶴姫やくざ帖』S 36 (1961) 6月・光風社	『花のお江戸で』S 36 (1961) 12月・東方社		『尺八乞食』S 35 (1960) 6月・光風社	『恋かたぎ侍話』S 25 (1950) 7月・東方社			『八幡鳩九郎』S 35 (1960) 12月・桃源社	『尺八乞食』S 35 (1960) 6月・光風社	東京文芸社	『代表作時代小説』S 34 (1959) 8月・東京文芸社	初収本

5 1	5 1	4 16	4 10	4 1	4 1	3 1	2 1	1 10	1 1	1 1	昭和 三六 (一九六二)年	12 1	12 1	12 1	11 1	月 日	
江戸の顔役	あのことこのこと(九)	江戸へ百七十里	小父さん志士	狙われた名刀	あのことこのこと(八)	あのことこのこと(七)	あのことこのこと(六)	櫛	隠密三國志	あのことこのこと(五)		極楽一丁目	上野と私	あのことこのこと(四)	あのことこのこと(三)	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	随筆	小説	小説	小説	随筆	随筆	随筆	小説	小説	随筆		小説	随筆	随筆	随筆	種類	
週刊サンケイ別冊	全集書き下ろし	週刊読完	小説倶楽部	エロティックミステリー	全集書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	サンデー毎日特別号	講談倶楽部	全集書き下ろし		家の光	上野	全集書き下ろし	全集書き下ろし	初出誌・紙名	
54 ? 72	9	? 翌年 6月3日	14 ・ 6	2 ・ 4	8	7	6	50	? 翌年 11月1日	5		12 ・ 1 ? 12	20 ・ 12	4	3	巻・号	
『江戸の顔役』S 37 (1962) 8月・角川書店	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 5月・講談社	『江戸へ百七十里』S 37 (1962) 8月・新潮社	『矢一筋 他』S 35 (1980) 5月・春陽堂		『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 4月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 3月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 2月・講談社	10月・春陽堂 『山手樹一郎短編時代小説全集一二』S 55 (1980)	『隠密三國志』S 37 (1962) 12月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 1月・講談社		『極楽一丁目』S 36 (1961) 12月・東京文芸社		『山手樹一郎全集付録』S 35 (1960) 12月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 35 (1960) 11月・講談社	初収本	

10	1	昭和三七(一九六二)年	12	12	12	11	10	9	9	8	7	6	6	5	月
19	10		1	1	1	1	25	1	1	1	10	1	1	日	
お助け河岸物語「註5」	あのことこのこと(十七)		侍の灯	「この物語」について	あのことこのこと(十六)	あのことこのこと(十五)	あのことこのこと(十四)	作者のことば	あのことこのこと(十三)	あのことこのこと(十二)	あのことこのこと(十一)	天の火柱	あのことこのこと(十)	下郎の夢	作品名
山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	随筆		小説	後記	随筆	随筆	随筆	後記	随筆	随筆	随筆	小説	随筆	小説	種類
サンデー毎日特別号	全集書き下ろし		報知新聞	単行本書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	単行本書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	全集書き下ろし	山陽新聞	全集書き下ろし	オール読物	初出誌・紙名
52	17		翌々									翌			卷・号
61			年		16	15	14		13	12	11	年	10	16	・
			3									4		5	号
			月									月			
			10									9			
			日									日			
『お助け河岸』S 39 (1964) 11月・桃源社	『山手樹一郎全集付録』S 37 (1962) 1月・講談社		『侍の灯 一〜四』S 38 (1963) 4月・光風社	『八大伝物語』S 36 (1961) 12月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 12月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 11月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 10月・講談社	『代表作時代小説』S 36 (1961) 9月・東京文芸社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 9月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 8月・講談社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 7月・講談社	『天の火柱 上下』S 37 (1962) 10月・桃源社	『山手樹一郎全集付録』S 36 (1961) 6月・講談社	『代表作時代小説』S 36 (1961) 9月・東京文芸社	初収本

3 20	3 1	2 1	昭和三八 (一九六三)年	?	11 12	10 15	9 15	8 23	5 1	4 21	4 1	3 24	3 1	2 15	2 3	2 1	月 日	
安寿と厨子王	母の死をみつめて	放れ鷹日記		千石鶴	竹光と女房	残暑	作者のことは	ばかむこの記	季節の言葉	たのまれ源八	あのことこのこと(二十)	わが小説	あのことこのこと(十九)	侍	俺たちの青春〔註59〕	あのことこのこと(十八)	作品名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
絵本	随筆	小説		小説	小説	随筆	後記	小説	随筆	小説	随筆	随筆	随筆	随筆	小説	随筆	種類	
単行本書き下ろし	婦人生活	小説現代		三社連合紙	週刊文春	大衆文学研究	単行本書き下ろし	文芸朝日	小説倶楽部	週刊漫画サンデー	全集書き下ろし	朝日新聞	全集書き下ろし	大衆小説	新週刊	全集書き下ろし	初出誌・紙名	
	3 月 号	1 ・ 1 ・ 11			特大号	5		1 ・ 5	15 ・ 5	翌々 年 4 月 8 日	20		8 ・ 3	5 月 17 日	18	巻 ・ 号		
『安寿と厨子王』S 38 (1963) 3月・講談社	『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社	『放れ鷹日記』S 38 (1963) 9月・講談社		『千石鶴』S 39 (1964) 5月・講談社	『竹光の女房』S 38 (1963) 9月・光風社		東京文芸社 『代表作時代小説』S 37 (1962) 9月・東京文芸社	『代表作時代小説』S 53 (1978) 11月・東京文芸社		『たのまれ源八 愛欲の川』S 39 (1964) 4月・東京文芸社	『山手樹一郎全集付録』S 37 (1962) 4月・講談社	『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社	『山手樹一郎全集付録』S 37 (1962) 3月・講談社			『山手樹一郎全集付録』S 37 (1962) 2月・講談社	初収本	

?	11	9	9	5	5	4	1	昭和三九(一九六四)年	?	11	9	8	8	7	6	月	
?	15	15	1	17	1	10	5		?	1	15	1	1	1	6	15	日
青春燃える	門下生の一人として	作者のメモ	監修のことは「註60」	娯楽読物に徹する	池袋で買ったステッキ	名将梅あり	青春に杯を		後家の春	上野というところ	作者のことは	残暑の道	あのこと「のこと」	恩師の出棺の日に	序	作品名・書名	
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名	
小説	序文	後記	序文	随筆	随筆	小説	小説		小説	随筆	後記	小説	随筆	随筆	序文	種類	
地方紙	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	単行本書き下ろし	朝日ジャーナル	月刊いけぶくろ	小説倶楽部	毎日グラフ		サンデー毎日特別号	上野	単行本書き下ろし	オール読物	大衆文芸	週刊大衆	単行本書き下ろし	初出誌・紙名	
				5月17日号	20	17・6	12月27日号			55・11		18・8	23・8	7月6日号		巻・号	
『青春燃える 上下』S 53 (1973) 5月・春陽堂	同成社	東京文芸社	『代表作時代小説』S 39 (1964) 9月・双葉社	『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社	『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社		『おすねと狂介』S 40 (1965) 1月・毎日新聞社		桃園書房	『山手樹一郎短編小説全集 七』S 51 (1976) 7月・	東京文芸社	『代表作時代小説』S 39 (1964) 9月・東京文芸社		『山手樹一郎随筆集』H 2 (1990) 12月・光風社	立体図書株式会社	『しあわせを奉仕する』S 38 (1963) 6月・	初収本

				昭和四〇(一九六五)年							月日
				昭和四一(一九六六)年							作品名・書名
				昭和四二(一九六七)年							執筆名
				昭和四三(一九六八)年							種類
				昭和四四(一九六九)年							初出誌・紙名
				昭和四五(一九七〇)年							巻・号
				昭和四六(一九七一)年							初収本
11	7	5	10	8	3	2	1	1	1	1	月日
1	18	1	13	14	31	1	14	11	3		作品名・書名
愉快からずや青春〔註62〕	牝犬	さむらい根性	幸福を売る侍〔註61〕	江戸に夢あり	さむらい読本	ペンと人	素浪人案内	一夜明ければ	三百六十五日		執筆名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎他	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		種類
小説	小説	小説	小説	小説	小説	鼎談	小説	小説	小説		初出誌・紙名
新生	小説倶楽部	サンケイスポーツ	週刊大衆	週刊新潮	週刊漫画サンデー	医家芸術	週刊大衆	週刊サンケイ	毎日グラフ		巻・号
	19・14	翌年6月10日	翌年11月23日	翌年4月2日	翌年12月29日号	9・2	翌年10月6日	新春特大号	翌年12月19日号		初収本
『青空の如く』S43(1968)1月・東方社	『うどん屋剣法』H1(1989)10月・光風社	『さむらい根性』S42(1967)8月・東京文芸社	『春の虹』H3(1991)4月・光風社	『幸福を売る侍』S42(1967)5月・双葉社	『江戸に夢あり』S41(1966)6月・新潮社	『さむらい読本』S41(1966)4月・実業之日本社	『素浪人案内』S42(1967)11月・双葉社	『山手樹一郎短編小説全集 三』S50(1973)9月・桃園書房	『三百六十五日』S41(1966)3月・毎日新聞社		初収本

月 日	作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初収本
2 15	わが友周五郎君のこと	山手樹一郎	随筆	信濃毎日新聞		『山手樹一郎随筆集』H2(1990) 12月・光風社
7 24	三日女房〔註63〕	山手樹一郎	小説	週刊サンケイ	7 月 24 日 号	『江戸へ逃げる女』S49(1974) 1月・ 広済堂出版
9 1	九月一日のこと	山手樹一郎	随筆	上野	101 ・ 9	
9 20	周五郎君のこと	山手樹一郎	随筆	大衆文学研究	20	
12 31	心あたらたまる年に	山手樹一郎	随筆	内外タイムス	12 月 31 日 号	『山手樹一郎随筆集』H2(1990) 12月・光風社
?	虹に立つ侍	山手樹一郎	小説	地方紙		『虹に立つ侍』S44(1969) 2月・講談社
昭和四三(一九六八)年						
3 1	叱られ祝言	山手樹一郎	小説	小説倶楽部	21 ・ 4	『山手樹一郎短編時代小説全集 一』 S55(1980) 10月・春陽堂
4 1	春の虹	山手樹一郎	小説	小説倶楽部	21 ・ 5	『春の虹』S50(1975) 4月・光風社
8 10	タクシー嫌い	山手樹一郎	随筆	サッポロ	納 涼 特 集 号	
11 11	曲がりかどの女	山手樹一郎	小説	週刊サンケイ	11 月 11 日 号	『山手樹一郎短編小説全集 一』S50(1975) 1月・桃園書房
?	まだ夏休み気分	山手樹一郎	随筆	朝日新聞		『山手樹一郎随筆集』H2(1990) 12月・光風社

12 1	10 30	7 1	5 25	5 1	3 20	1 11	1 1	昭和四五（一九七〇）年	10 10	6 1	1 1	昭和四四（一九六九）年	月 日
筈	作者のことば	健筆家山本周五郎	時代ユーモアの創始	春雪忌	紅梅の鉢	福の神だという女	二十年目の情熱		作者のことば	私の生甲斐	非情なる事情		作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎他	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎		執筆名
随筆	後記	随筆	対談	随筆	随筆	小説	小説		後記	随筆	小説		種類
旅の味どころ	単行本書き下ろし	新潮日本文学	単行本書き下ろし	小説会議	自然と盆栽	北国新聞	小説新潮		単行本書き下ろし	大衆文芸	別冊サンデー毎日		初出誌・紙名
12 月号		26		32	1 ・ 1	1 月 25 日	24 ・ 1			29 ・ 5	新春特大号		巻・号
『山手樹一郎随筆集』H2（1990）12月・光風社	東京文芸社 『代表作時代小説』S45（1970）10月・	S45（1970）7月・新潮社 『新潮日本文学 山本周五郎集 月報23』	1月・番町書房 『日本伝奇名作全集 八』S45（1970）	『山手樹一郎随筆集』H2（1990）12月・光風社	『山手樹一郎随筆集』H2（1990）12月・光風社	8月・桃園書房 『山手樹一郎短編小説全集 二』S50（1976）	東京文芸社 『代表作時代小説』S45（1970）10月・		10月・東京文芸社	『代表作時代小説』S44（1969）	10月・東京文芸社 『山手樹一郎随筆集』H2（1990）12月・光風社		初収本

発表年・発表誌紙不明作品												月日
作品名・書名	執筆名	種類	初出誌・紙名	巻・号	初収本							
二度目の花嫁	山手樹一郎	小説			『財布の命』 S 35 (1960) 2月・光風社							
天保の鬼	山手樹一郎	小説			『天保の鬼』 S 32 (1957) 6月・同人社							
手拭浪人	山手樹一郎	小説			『うぐいす侍』 S 15 (1940) 年1月・博文館							
少年剣士	山手樹一郎	小説			春陽堂 『山手樹一郎長編時代小説全集 八四』 S 55 (1980) 3月・							
ざんげ雨	山手樹一郎	小説			『十六夜巷談』 S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房							
紺屋の月	山手樹一郎	小説			『尺八乞食』 S 35 (1960) 6月・光風社							
紅顔秘帖	山手樹一郎	小説			『紅顔秘帖』 S 32 (1957) 4月・同人社磯部書房							
元禄いろは硯	山手樹一郎	小説			『元禄いろは硯』 S 26 (1951) 2月・同光社磯部書房							
首	山手樹一郎	小説										
江戸の恋風	山手樹一郎	小説			『昭和大眾文学全集二』 S 31 (1956) 1月・桃源社							
うちの味噌汁	山手樹一郎	随筆	三井とあなた		『山手樹一郎随筆集』 H 2 (1990) 12月・光風社							
仇討ちごよみ	山手樹一郎	小説			『江戸情話』 S 25 (1950) 8月・東方社							

							月 日
浪人若殿	竜虎少年隊	山男が拾った娘	屋根の声	振り出し三両	武道士産娘	百姓宗太	作品名・書名
山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	山手樹一郎	執筆名
小説	小説	小説	小説	小説	小説	小説	種類
							初出誌・紙名
							巻・号
『浪人若殿 上下』S 34 (1959) 4月・和同出版社	『竜虎少年隊』S 29 (1954) 4月・偕成社	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『十六夜巷談』S 25 (1950) 10月・同光社磯部書房	『尺八乞食』S 35 (1960) 6月・光風社		『恋討手』S 28 (1953) 6月・同光社磯部書房	初収本

【註】

[1] これまで昭和三「一九二八」年七月『少年少女譚海』九巻七号に井口長二の名で発表された「大剣聖荒木又右衛門」が、山手樹一郎の最初の著作とされてきた。しかし今回の調査で、大正六（一九一七）年一〇月『幼年世界』七巻一〇号に井口ちようじの名で発表した「鸚鵡の声」が最初であると判明した。山手樹一郎自身も「山手樹一郎略年譜」(『時代傑作小説』昭和三五「一九六〇」年九月、三世社)において、「大正六年（一九一七）一八歳 博文館発行の『幼年世界』に童話などを寄稿」と書いている。もちろん現在まで全集や単行本には採録されていない。

[2] この童話は、二段組五ページの短篇で、阿母さんの病気を治すために太郎が、飼っている鸚鵡の声を頼りに光の玉を取りに行くという内容である。「銀の鍵」は、四章から始まっている。さらに六章までで「次号へつづく」書いてあることから、山手樹一郎の著作における最初の連載小説だと判明した。しかし今回の調査では、前号と次号が発見出来ず、五巻二号のみ実際に見ることが出来た。

[3] 小学新報社発行の『少女号』は、山手樹一郎が編集に携わっていた。そのため「編集室より」にも、「正月号からつゞいて二月号とふやうに、この暮の編集室のいそがしさといつたら、すばらしいものです。しかし、編集のことは他の先生がおかきになって、いづれのお鼻のたねにしていることと思ひますから、私はまた悪口をお話ませう。この間、私が原稿紙をいれしておくのに、クロースの紙入れを買つて来たのです。すると、まづ清水先生が『これはいゝ。』といつて、その日の中にも買ひました。二人のおそろひ

の紙入を見た、おひげの鹿島先生が『なんだ、子供みたいなものを持つてよろこんでいる。』と笑ひましたが、表や中をみているうちに感心してしまつて、『僕も一つあがなはう。』と、到頭おひげのある子供が、また一人ふえてしまいました。』という編集者としての記述がある。

[4] この随筆は山手樹一郎が、生後間もない長男の井口朝生に向けて送つたものである。この随筆は、山手樹一郎の死後見つけたもので、井口朝生は『山手樹一郎随筆集 あのことこのこと』(平成二「一九九〇」年二月、光風社)において、「歿後に生前愛用していた仕事机の引出を整理中たまたま発見した生原稿である。東京文房堂で青い野の四〇〇字詰原稿用紙八枚をかんじ縫で綴じてあつた。(略)ちなみに山手樹一郎は観世小縫いわゆるかんじ縫を作るのがじょうじであつた」と書いている。

[5] 大正一五「一九二六」年二月『少女号』一巻二号に発表された「雪の日物語(粉雪)」の構成は、雪の日に関する童話を三人の作家が書いたものになっている。そのうち、山手樹一郎は井口長二の執筆名で「粉雪」という童話を書いている。

[6] 大正一五「一九二六」年七月から一〇月にかけて『少年世界』三二巻七号から一〇号に連載された「少年水夫」は、タイトルの横に「欧州大戦実話」とあり、フランスの少年水夫の実話を伝記として書いている。山手樹一郎の著作では唯一、日本ではなく、海外の題材をあつかった珍しい著作である。

[7] 「スイートホーム探検」は、昭和三年「一九二八」年四月、山手樹一郎が編集に携わっていた『少女世界』二三巻四号に発表された。この著作は翌月、

翌々月の著作に続く連載ものである。

[8] 『少女世界』は博文館発行の雑誌で、山手樹一郎は編集に携わっていた。この『少女世界』では、読者からの作文を募集しており、山手樹一郎はその選評を担当していた。

例えば昭和五「一九二八」年八月の二五卷八号では、鈴木よね子という読者が「私の弟」と題して「私の弟はほんたうの弟ではなかつたのです里子だつたのです。——お母様がなくなられてお父様一人きりで、どうする事もできなくなり、それで引取つたのです。(略)母のない子は、ほんとかはいさうなものだと、つくづくかんがへます。——神様弟をいつまでもく私のそばにおいて下さいお願いです」という作文を投稿している。この作文を一等にした山手樹一郎は、「これは少女の作文としては、かなり難しい題材です。でも、思っていることが、よく出ています。文章よりも、あなたの真心にほろりとさせられます」と評している。

また昭和五「一九三〇」年二月の二五卷二二号では、「瘋癲院」と題した「お好きだつたリングゴを、召し上がつて頂かうと持つて来たのに。(略)向かひの白壁に、カ一っぱいにリングゴを打つて喜んでいらつしやる。『どうしてこんなこんなに…』壁にへばりついたリングゴを見つめてつきそひの叔母様も重い吐息をなさつた」という作文に、「気の狂つた人を見た時、まづ思はれるのは、その人よりも、肉親の方々の嘆です。まして、丈夫であつた時の事を知っている、あなたの心が、よくこの作文で察することができます」と評し三等を与えている。この作文の選評は、昭和五「一九二八」年八月の二五卷八号から昭和六「一九三二」年一〇月の二六卷一

〇号まで山手樹一郎が担当している。

[9] 「シネークリームの効きめ」は、昭和三「一九二八」年五月『少女世界』二卷五号に発表された。この著作のタイトルの横に「またはスイートホーム探検後日譚」とあり、前月の「スイートホーム探検」の続編であることが分かる。

[10] 「二人の理屈屋」は昭和三「一九二八」年六月『少女世界』二卷六号に発表された。この著作のタイトルの横には「シネークリームの効きめ後日譚」とあり前々号の「スイートホーム探検」の続編であることが分かる。

[11] これまで山手樹一郎の最初の著作は、昭和三「一九二八」年七月『少年少女譚海』九卷七号に井口長二の執筆名で発表された「大剣聖荒木又右衛門」だとされてきた。しかし註「1」にあるように、今回の調査で大正六（一九一七）年一〇月『幼年世界』七卷一〇号に井口ちようじの名で発表した「鸚鵡の声」が最初であると判明した。さらに「大剣聖荒木又右衛門」以前には、「鸚鵡の声」を含めて二七の著作があることも分かった。

[12] 昭和三「一九二八」年一月『少年世界』三四卷二二号に発表された「孝子渡邊畢山」は、渡邊畢山の伝記を書いた著作である。この著作は、昭和一九「一九四四」年一二月に野間文芸奨励賞を受賞する「獄中記」、「檻送記」、「蟄居記」（後に『畢山と長英』一冊にまとめられる）にも基になつていると考えられる。

[13] 昭和四年「一九二九」年二月『朝日』一卷二二号に発表した「松さんの禁酒」は、「口井蝶耳」という執筆名で書かれている。一見誰だか分からない名だが、「くちいちようじ」と読めば、「いぐちちようじ」をもじつたも

のだと分かる。

高森栄次も「博文館のころ」(『大衆文芸』二九巻五号、昭和四四「一九六九」年六月、新鷹会)において、「私が博文館へ入ったのは昭和三年で、(略)山手さんはその頃既に『少女世界』の編集長であった。三〇歳前後であつたらうか。もちろん未だ山手樹一郎ではない。本名井口長次、編集のかたわら少女ものを書いたり少年物を書いたりする時のペンネームが井口朝二、または井口長二、ご本人はお忘れかもしれないけれども、私が助手をしていた『朝日』という雑誌に、口井蝶耳という名前でユーモアものを書いた時もあった」と回想している。回想などで何となく存在が触れられていても、著作自体が発見されていないということは、山手樹一郎研究において多数あつた。この点も今回の調査で解消出来た。

[14]「白子屋お駒」は、「競艶女夜叉伝」というシリーズの一つとして書かれた。

[15]これまで山手樹一郎の執筆名で書かれた最初の著作は、昭和八「一九三三」年一月『サンデー毎日』に発表された「一年余日」だとされてきた。しかし今回の調査で、その三カ月前の昭和八「一九三三」年八月『少年少女譚海』に発表された「空撃三勇士」が、山手樹一郎の執筆名で書かれた最初の著作だと分かった。この著作以降、山手樹一郎の名で執筆を続ける。

[16]昭和八「一九三三」年一月『サンデー毎日』に発表された「一年余日」は、第二三回サンデー毎日大衆文芸の選外佳作になる。千葉亀雄はその選評で、「山手君の『一年余日』これも今度多かつた『事実小説』の中での随一の佳作といへる。『事実』の方が、とてもテキパキと面白く纏まっているため、作者の想像力のやり場の狭いらしかったのが残念。それだけ、無駄

のない、記実(原文ママ)のしつかりした点を、正直、私は高く買はうと思ふ」と言及している。

この著作について山本周五郎は「畏友山手樹一郎へ」(『時代傑作小説』昭和三五「一九六〇」年九月、三世社)において、「山手の処女作は、たしかサンデー毎日に出たものだつたと思うが、『一年余日』という短篇小説で、僕が話したテーマと題をそのまま彼は書いてきた。サンデー毎日の見開き二頁位の短篇だつたけれども、非常にすつきりして、キュートな作品だつた。数多い彼の作品の中でも、非常にいいものではないかと思うんです」と言及している。これに対し山手樹一郎自身も「健筆家山本周五郎」(『新潮日本文学 二六巻』昭和四五「一九七〇」年七月、新潮社)において、「私が編集者という不安を感じだして、大衆作家にならうと考えたのは昭和八年ごろからで、それからの彼は私にいろいろな助言をしてくれたり、参考書をかしてくれたりした。私が腕だめしにサンデー毎日の懸賞小説に応募して佳作に入った原稿は、はじめに彼に読んでもらい、題名は『一年余日』がいいよと、題までつけてもらったものである」と回想している。

このようなこともあり、山手と山本周五郎は特に結びつきの強い間柄であつた。「子連れ狼」の原作者として著名な小池一夫も「狼の夜話 俺、劇画、四〇年」(平成二四「二〇二二」年二月、小池書院)において、「東京に出てきた僕は、すぐに池袋の要町にある山手樹一郎先生のご自宅に伺いました。(略)何度か断られたんですが、それでも何度も押しかけて、何度目かによつと許されて、『お茶汲み』兼『書生』として『お出入り自由』になったんです。(略)当時、山手先生のお宅には山本周五郎先生がよくい

らしゃってました。『さぶ』とか『樫の木は残った』とかで有名な作家ですが、周五郎先生は、山手先生と無二の親友で、お互いの作品を手伝ったりなんかもされてました」と述べている。

また最初に映画化された山手樹一郎の著作が「二年余日」であった。タイトルは『武道大鑑』で、昭和九「一九三四」年一月二日から伊丹万作監督、片岡千恵蔵主演で千恵蔵プロダクションと日活から配給された。この映画は、同年の日本映画部門の興業成績第四位にランクインしている。加えてこの映画は日本最後の無声映画であった。

山手樹一郎の長男である井口朝生は「さむらい人生―対談・山手樹一郎の世界③」（『山手樹一郎短編時代小説全集 三』昭和五五「一九八〇」年六月、春陽堂）において、「あれだ、『武道大鑑』……あれ、『一年余日』が、千恵プロで伊丹万作氏の監督で、解題されて映画になりましたでしょ？（略）当時のある文化レベルってものが、ああいうふうな明るさを要求した時代かもしれないですね。世相が暗くなってきたんでね。これは社会的背景を考えるとそうじゃないかと思うんですけどもね」と言及している。

当時の時代劇映画について筒井清忠は『時代劇映画の思想』（平成二〇「二〇〇八」年一〇月、ウェッジ文庫）において、「結局トーキーの登場が、剣戟シーンを主軸とする時代劇を、衰退させることにつながっていったのであった。そうした中で現われた一つの重要な流れに、片岡千恵蔵の千恵プロ（片岡千恵蔵プロダクション）が作った『明朗時代劇』があった。片岡千恵蔵プロダクションを興すのに際して伊藤大輔監督の所に相談に行った所、伊藤から『自分のところにいる若い人を二人提供するから、その人た

ちとともいままの時代劇とは違う新しい流れを作るように』という趣旨のアドバイスを受けた。『若い人二人』すなわち、伊丹万作と稲垣浩という若いシナリオライターと監督がこうして千恵プロに託されたのである。そしてこの二人の手で新しい知的で明朗な時代劇の流れが作られていくこととなった。（略）こうした映画は、『インテリ向き』でもあり一般の人には必ずしもなじめなかったのではないかと思われるが、陰惨な大剣戟や傾向映画的なものにやや嫌気がさしはじめ、明るい作日が求められはじめていたという状況にはマッチしていたと見ることができよう」と論じている。すべ刀を抜くのは「異常性格」だと言っていた山手樹一郎原作の映画が、「陰惨な大剣戟」に嫌気がさしていた大衆にとっては、受け入れ易い映画だったと言える。

〔17〕昭和一五「一九四〇」年一月に博文館から発行された『うぐいす侍』は、山手樹一郎最初の単行本である。

〔18〕若殿と双子でありながら、片方は引取られる風習のために浪人に身をやつしている主人公が、お侠な女と義賊の手下と共に、お家に乗っ取ろうと企む悪を倒し、姫と結ばれるという展開は、山手樹一郎の著作における最もポピュラーな話の筋である。この話の筋は、昭和一四年一月から翌年六月まで『岡山合同新聞』に連載された「桃太郎侍」が有名である。しかし今回の調査で、昭和一一「一九三六」年三月から五月まで『少年少女譚海』で連載された「飛燕一殺剣」が、この話の筋を最初に取り入れた著作だと判明した。山手樹一郎自身も武蔵野次郎との『対談』時代ユーモアの創始（『日本伝奇名作全集 八』昭和四五年「一九七〇」年五月、番町書房）に

において、「あれ『桃太郎侍』…執筆者註」はね、ほかの題で一ぺん書いてい
ることがあるんです」と発言している。これは、「飛燕」「殺剣」を指している。
言及はされていないが、発見がされていないという山手樹一郎研究におけ
る独特の状況が、一つ解消された。

〔19〕「辛鼠小僧」についての、同時代評を発見した。山下賢次郎「大衆芸芸
来の佳作」『日本学芸新聞』昭和一一「一九三六」年七月一日、学芸新聞
社）で、「新青年へ山手樹一郎氏の書いた『甘辛鼠小僧（原文ママ）』は、
筆触が新しく相当の見識を持つて書いてこのがうなづかれる」という
高評価の内容である。

〔20〕昭和一一「一九三七」年一月から『少女画報』に連載された「かげろう草
紙」だが、同年七月までしか実物を確認出来なかったため、連載終了年月
は分からなかった。他の著作における巻号欄の「？」も同様である。

〔21〕「喧嘩大名銘々伝」は、初収の際に「喧嘩大名」に改題されたと、これまで
されてきた。確かに「喧嘩大名銘々伝」の後半部分は「喧嘩大名」だが、
前半は明らかに異なった内容であるため、二作は別の著作と見なした方が
適切であろう。いわゆる現在の内容である「喧嘩大名」の初出は、昭和一
七「一九四二」年七月の『講談雑誌』七月号に発表された「勝鬨武士」が
それにあたる。

〔22〕「うぐいす侍」は、これまで「発表年・発表誌紙不明」、もしくは「昭和九
「一九三四」年『サンデー毎日』の懸賞に応募入選となる」（上野「雄」聞
き書き山手樹一郎』昭和六〇「一九八五」年六月、大陸書房）とされてき
た。だが、昭和九「一九三四」年の『サンデー毎日』を実際に見ると、懸

賞には入選していないし、「うぐいす侍」自体掲載されていない。そこで他年
の『サンデー毎日』を調査すると、昭和一一「一九三七」年四月の『サン
デー毎日』一六巻一六号に「うぐいす侍」が掲載されていた。よって「う
ぐいす侍」の初出は、昭和一一「一九三七」年四月『サンデー毎日』一六
巻一六号であると判明した。

この著作について山手樹一郎自身は「わが小説」（『朝日新聞』昭和三
七「一九六二」年三月二四日、朝日新聞社）において、「時代物にユーモ
ア小説の見あたらないことである。私はこれだと思った。この着想は決し
て悪くなかったようだが、さてこれを実現しようとなると、その時代の風
俗なり生活なりをかなり突っこんで自分のものにならないと、ユーモア味な
ど到底出てくるものではない。といって、そんな研究などは一年や二年で
できるものではないので、とにかく持っている知識だけで試作をやってみ
ることにして、『一年余日』を書き、『うぐいす侍』を書いた。はじめの
『一年余日』は五十枚ほどのものだが、堅すぎて、自分が意図したほどの
ユーモア味は出せなかった。次の『うぐいす侍』は二十三枚ほどのものだ
が、これはある程度その味が出てきたと思った。しかし、私はここで大き
な失敗を一つしている。それは青木又六という主人公に、食いかせぎに村
へ入りこんで百姓一揆を煽動している口先だけの浪人者を、切らせている
ことである。人を切るという気持にユーモアなどあるはずはない。（略）
『うぐいす侍』の一篇は私には思い出深い小説の一つになっている」と回
想している。

また武蔵野次郎は「偉大なる山手樹一郎文学」（『大衆文芸 七月号』昭和五三「一九七八」年七月、新鷹会）において、「まことに軽妙な描写を以て書き出されているプロログから、読者には青木又六という下級侍のイメージが明瞭に浮んでくる。又六は亀山藩の侍だが、藪ぐいすを飼育することを内職としている設定なども面白い。若い下級侍などはせつせと内職に励まなければ生活できなかったという徳川後期の藩侍の実態などは、最初から山手作品の大きなテーマとして捉えられていたことも、本篇でよく分かる。（略）短篇として起承転結のよく調った佳作であり、読後感もいい。又六が藩中で評判の美女に思ってもいない（又六自身にとって）恋文を届けるという重要な段取りで、すぐ想起されるものに、志賀直哉の『赤西蠣太』がある。『赤西蠣太』は仙台藩を退去する手段として、これも美人の腰元小江に付け文をするが、それが意外な発展を見せるという物語設定であり、その点だけでは、又六と蠣太には相通じるものがある。ということ、名もない下級侍、あるいは醜男にとつて、藩中で名高い美女に恋文を付けるということが、昔の時代ではいかに大事件であったかという点であり、封建期の男女関係（とくに侍階級の）の厳しさがうかがえて興味深い。そして、そうした厳しさが生む人間関係の可笑しさを、この両作品が巧みに小説に採り入れている面白さである」というように、志賀直哉の「赤西蠣太」とのつながりを示唆している。

そして上野一雄は、『聞き書き山手樹一郎』（昭和六〇「一九八五」年六月、大陸書房）において、『簡潔な地の文と、含蓄ある会話の組合せが絶妙である。わたしは、余計なもの入りこむ余地が全くないと言ったが、

当にその通りで、短い文章の裏に情景、雰囲気脈々と流れていて、読者を堪能させ納得させる原動力となっている」と評している。

加えて「うぐいす侍」は、様々に他メディア化されている。昭和一四「一九三九」年八月三一日から、丸根賛太郎監督、片岡千恵蔵主演で日活から配給されている。この映画については武蔵野次郎は「山手樹一郎氏の位置―随想風に―」（『山手樹一郎全集 一九巻付録』昭和三六「一九六一」年十月、講談社）において「映画の話を出したついでにもう一つ想い出すと、これも昭和十四年に、当時新進監督丸根賛太郎が片岡千恵蔵の主演で撮った『うぐいす侍』の面白さであった。山手氏の原作がすぐれていたのも当然だが、映画のそれにもかにも新進監督の意欲溢れる軽快で明るく、楽しい映画であったことが懐しく想起される」と言及し、「偉大なる山手樹一郎学」（『大衆文芸 七月号』一九七八年「昭和五三」七月、新鷹会）においては、「当時としてはひじょうに洒落た時代劇であり、土堤に並んだ千恵蔵扮する若侍と、市川春代の娘が、そのまま雪だるまのように花に包まれているラストシーンの面白さなど、今もって記憶に鮮明なものがある。山手作品がそのデビュー時から持っていた明調を基本とする作調が、当時の千恵蔵時代劇の明朗性とよくマッチしていたところに、この映画化の成功があったと思われる」と指摘している。この映画も「一年余日」で先述したように、明朗時代劇映画としてその明るさ、面白さが大衆に受け入れられたと言える。

さらに「うぐいす侍」は仲代達也主演でラジオドラマ化もされている。その脚本を担当した上野一雄は『聞き書き山手樹一郎』昭和六〇「一九八

五」年六月、大陸書房)において、「わたしは昭和三十六年一月五日、TBSラジオの依頼で『うぐいす侍』の脚色を引き受けた。(略)原作は、せいぜい三十枚程度の作品で、これを四十五分におさめるためには、原作にはないシーンか、セリフを書き加えなければならない。ところがである。なん度か原作を読みかえし、分析してみたが、余計なもの入りこむ余地が全くないのである。そこで全体を、ふくらませることにした。原作では軽輩又六が同僚に金を貸してくれと頼みまわるところから始まっているが、わたしは、その前に、野に出て子供たちに手伝って貰いうぐいすをとるシーンを設定した、そして昼飯どきに又六がたべる白米のにぎりめしを、子供たちがびつくりして眺めることで、農民の貧しさを示し、子供たちに餅を持ってきてやると約束したところから原作に入って行った。そしてラストに、子供たちに餅をくばっている又六を、頼母父娘が眺めて会話を交わすシーンをつけ加えた」と述べている。

〔23〕 「元禄片恋い娘」は、現在では「白梅紅梅」に改題されている。

〔24〕 昭和二三「一九三八」年六月から二二月にかけて『新少年』四巻六号から二二号に連載された「剣奸暴れ剣法」も「飛燕一殺剣」と同じで、若殿と双子でありながら、片方は引取られる風習のために浪人に身をやつしている主人公が、お侠な女と義賊の手下と共に、お家に乗っ取ろうと企む悪を倒し、姫と結ばれるという筋である。またヒロインの名前も同じで百合姫である。

〔25〕 「紅だすき一刀流」は、現在では「紅だすき無頼」と改題されている。

〔26〕 「出世座頭」は、現在では「塙検校」に改題されている。

〔27〕 「果たし状由来」は、現在では「開発奉行」に改題されている。

〔28〕 「桃太郎侍」は山手樹一郎の著作において、最も著名といっている。しかし先にも述べたように、その初出年月は誤り続けられてきた。『対談』時代ユーモアの創始(『日本伝奇名作全集 八』昭和四五年「一九七〇」年五月、番町書房)において山手自身が、「はじめての新聞小説で、岡山の合同でしたかな、あれは一五年ですね」と言っており、昭和一五年頃が初出年だと思われてきた。参考にした八木氏の年譜でもそうである。そんな中、昭和三四「一九五九」年一月に出版された単行本、『少年の虹』(東都書房)の著者略歴では、「昭和十四年、処女長編『桃太郎侍』の執筆を機として：(後略)」と書かれている。その後、佐々木浩が昭和五四「一九七九」年三月の『国文学 解釈と観賞』(至文堂)で山陽新聞社編集局資料部に問い合わせ、その書簡をもとに初出年は昭和一四年一月二日から翌年の六月三〇日までと訂正している。そして翌月に出版された『大衆文学通史・資料 大衆文学大系別巻』(講談社)でも担当者の磯貝勝太郎によつて初出年が訂正されている。しかし、それ以降の年譜や再録本においても未だに『桃太郎侍』の初出年は昭和一五年となっているのが現状である。今回国会図書館で実際に『岡山合同新聞』を調査したところ、『桃太郎侍』の初出年は、佐々木氏の訂正の通り昭和一四年一月二日から翌年の六月三〇日までであった。

加えて連載最終回には同時代読者からの感想が二つ掲載されている。これは新たな発見なので、引用しておく。「面白い面白い夕刊の『桃太郎侍』愈よ終結を告げる事と存じます、小生過去かゝる面白き小説に接したるこ

とはありません。山手先生に感謝いたします。願くば今一度山手先生の快作を吾々「桃太郎侍」衆に発表して下さいます。願う御座いました」(和気群伊部町、桃太郎侍衆、昭和一五「一九四〇」年六月三〇日)と、「桃太郎侍はいつも楽しんで読んでました、先日どなたかの御説の通りかかってない、堅実なそれで上品で美しい小説でした、さしゑも美しく、これが終るのかと思ふと大変惜しいです、今後もうこのやうな上品な小説を掲載して下さい。終りに山手、矢島両先生の御健康と益々御精進のほどお祈りします」(一愛読者、昭和一五「一九四〇」年六月三〇日)がそれである。

またこの「桃太郎侍」は、一般読者からの人気が非常に高かった。山手樹一郎の師である長谷川伸は「至妙な説話文学」『山手樹一郎全集 一 二巻付録』昭和三五年九月、講談社)において、「最初は読者の間にさしたる注目もひかなかったが、ほんの暫く時がたつとすばらしいウケ方で、例えば新聞の配達さんがその日の分を先ず以て読んでいて配達するので、『新聞屋さんどうなった?』と新聞を受取るお得意さんに言葉せわしく聞かれると、『配達さんが、『いよいよやっ付けそうですよ』と答える、と客の方は喜んで、『しめた……』と新聞をひらき、『桃太郎侍』の立ち読みをはじめた。この例えは岡山の人から聞いたものである」と述べていることから分かる。ちなみにこの長谷川伸の資料はよく引用されるが、出自が不明であった。これも今回の調査で、『山手樹一郎全集 一 二巻付録』(昭和三五年九月、講談社)だと判明した。

さらに『桃太郎侍』はプロレスラーのジャイアント馬場も好きだったよ

うだ。彼は、山手樹一郎の著作がお気に入り、ジャイアント馬場の歴史小説十六文キック『ダ・ヴィンチ』平成六「一九九四」年九月、メディア・アフアクトリ―)では、「何が面白かったけな。いっばいあるからねえ……。ある意味じゃドラマ化された『桃太郎侍』じゃない」と書いている。

また山手樹一郎自身が「あのこと(一)」「(二)『山手樹一郎全集 一 巻付録』昭和三五年九月、講談社)において、『桃太郎侍』で思い出すのは、おなじ自分の小説でも運不運があると見えて、これは終戦前から何度も映画化の話がありながら、いつも実現せずつまっていた。はじめて映画になったのは終戦後で、大映が「修羅城秘聞」と改題して、前後篇で撮ってくれた。主演は長谷川一夫で小鈴が轟夕起子、伊賀半九郎は大河内伝次郎だった。その後市川雷蔵が取りあげ、最近では東映の里見浩太郎が撮っている。おなじものを三度映画化されたのは、私のものとしては今のところ『桃太郎侍』だけである」と回想している。「桃太郎侍」は、二〇一二年現在までに山手樹一郎の著作では最多の六度映画化されている。

[29] 山手樹一郎の著作が初めて採録されたのは、『青春艦隊』(昭和二年「一九三八」年八月、パブリ社)に採録された「師走十五日」である。ちなみに山手樹一郎単身での単行本は先述した、『うぐいす侍』(昭和一五「一九四〇」年一月、博文館)である。

[30] 博文館発行の『少年少女譚海』は、昭和一五「一九四〇」年から『科学と国防 譚海』にタイトルが変更される。「男女」が無くなっていることから、読者対象を引き上げていると言える。また表紙の絵も少年少女から風景や動物、軍人に変化している。中川裕美は『少年少女譚海』目次・

解題・索引』(平成二二「二〇二〇」年四月、金沢文圃園)において、「一九三〇年代末期からは、初期の頃には雑誌の九割を占めていた小説が急速に少なくなり、代わりに、国防や科学に関する読物が多く掲載されるようになっていた。このような変化は、『譚海』に限らず、ライバル誌だった講談社の『少年倶楽部』や『少女倶楽部』、実業之日本社の『少女の友』などにも見られる。その背景には、内務省による児童読物への検閲があった。(略)一九四〇年(昭和一五)年、二二巻一号より、誌名が『科学と国防 譚海』に変更された。『雑誌年鑑 昭和一四年版』の雑誌紹介には、『少年少女向の小説、実話を中心としてこれに科学記事を配合す』とあるが、『同 昭和一五年版』になると『昨年一〇月号より少年少女向きの編集を全般的大衆雑誌に変更す』となり、更には『同 昭和一七年版』には『二〇歳前後の男女に平易なる科学知識国防思想の普及を図る』へと変化している」と論じている。

また山手樹一郎の長男である井口朝生は、「かつて父の編集していた博文館の『少年少女・譚海』が『科学と国防・譚海』と時局色に衣更していた時代である。その編集部へ、およそ科学と国防とは縁遠い父の短篇小説を届けに行った。締切に遅れた原稿を雑誌社へ持参する仕事は、なぜかわが家では私の役目になっていた。一回運び屋を勤めると、交通費という名目で一円貰えた。これはかなり割のいい小遣い稼ぎでもあった」と回想している。確かに当時、山手樹一郎が『科学と国防 譚海』に発表した著作は「輝く海軍の父」と、「幕末海軍の創生」という口絵の文だけが科学と国防に適した著作である。それ以外の「春風街道」、「飛燕桜吹雪」、「緋牡丹

法」、「赤槍武士道」、「彰義隊破る日」、「武士と刀剣」、「維新夜話」、「鴛鴦春秋」、「伊能忠敬」、「江川太郎左衛門」、「高島秋帆」、「垣庵と秋帆」、「競争者」、「十四日の朝」、「密航手順」、「吹雪く桜田門」、「御殿山焼打」、「寺田屋事件」、「薩英戦争」という著作の数々は、科学と国防には縁遠いものである。

[31] 「頑張り武道」は、現在では「げんこつ青春記」と改題されている。

[32] 「戊辰進軍譜」は、現在では「恋風街道」と改題されている。

[33] 「幕末軍艦役」は、現在では「海の恋」と改題されている。

[34] 昭和一六「一九四二」年二月『講談雑誌』一二月号に発表された「感激の江田島」は、山手樹一郎が江田島海軍兵学校へ取材をしたものを随筆にしたものである。

[35] 昭和一七「一九四二」年三月『大衆文芸』四巻三号に発表された「余香抄」は、第一五回直木賞候補になっている。しかしこの年は受賞作無しであり、「余香抄」に対しては、選考委員の小島政二郎が『余香抄』は前半がいい。後半は少々センチメンタルの為の甘さが、失敗を招いている。主人公の会話、恰も文学青年の如し』(『文芸春秋』昭和一七「一九四二」年九月、文芸春秋社)と言及している。

[36] 昭和一七「一九四二」年七月『講談雑誌』七月号に発表された「勝鬨武士」が、現在の「喧嘩大名」の初出作品である。

[37] 昭和一七「一九四二」年一月『科学と国防 譚海』二三巻一号に発表された「競争者」は、昭和二四年六月の『近代ロマン』に「競争侍」という別の題名で掲載されている。内容は全く同じである。

〔38〕八木昇「山手樹一郎年譜」(『大衆文学大系 二七』昭和四八〔一九七三〕年七月、講談社)によると、昭和一七〔一九四二〕年に北海道新聞で連載されたという「東征序曲」は、現在では「恋天狗」と改題されている。

〔39〕「男の槍」は、現在では「槍」と改題されている。

〔40〕昭和一八(一九四三)年七月から二月まで連載された「獄中記」、昭和一九(一九四四)年四月から五月まで連載された「檻送記」、同年六月から一〇月まで連載された「蟄居記」は第四回野間文芸奨励賞を受賞する。この三作は、翌年『崑山と長英』として一冊まとめられた。

〔41〕昭和一八〔一九四三〕年『科学と国防 譚海』二四巻七号に発表された「幕末海軍の創生」は、玉井徳太郎が書いた口絵に山手樹一郎が文章を書いたものである。

〔42〕註「40」に同じ。

〔43〕註「40」に同じ。

〔44〕「明治元年」は、現在では「ほんくら与力」と改題されている。

〔45〕「夢介千両みやげ」について山手樹一郎は、「以前から時代小説で、なにか新しいユーモア小説はできないものかと考へていたが、終戦後われ人共にあまりにもせち辛い世相を見せつけられて、こんな時代にこそそのんびりした楽しい小説を書いてみたいものだ」と切実にその感を深くし、大人の童話のつもりで書き出したのが本篇である(『新大衆小説全集 九巻』昭和二五年一月、矢貴書店)と書いている。

そんな「夢介千両みやげ」は「桃太郎侍」と双璧をなす程の人気を博し、反響があった著作である。初出の『読物と講談』(公友社)には「愛読者

ルーム」という欄があり、「夢介千両みやげは毎月愛読しています。御誌ならではの好読物であると褒めておきます」(東京・藤井二郎、昭和二三〔一九四八〕年一〇月三巻一〇号)や、「私は夢介党です。時代小説に新しい息のかゝった読物として山手先生にお礼申します」(和歌山・谷口しげる、昭和二五〔一九五〇〕年六月五巻六号)や、「夢介お銀、六・七月は無事であったが、八月号は巡礼旅へ出発直後、遂に起こった大変事、山手先生、どうか無事に旅が終ります様に祈ります。一日も早く新家庭が築かれる様にお願ひします」(兵庫・マサ坊、昭和二六〔一九五一〕年一月六巻一三号)といった反響の声が掲載されている。またその反響は男性からだけでなく、「ルームに始めて(原文ママ)投書させて頂きます。私は夢介の大ファンです。全国の誰にも負けないくらいの一話から何度も繰り返し読みました。そして病床のつれづれに山手先生や中先生のことなど色々想像しておりましたところ、新春号に先生方のお写真が出ていたので私の想像に近かつたこと心からうれしく思いました」(千葉・渡邊フー子、昭和二四〔一九四九〕年六月四巻六号)や、「始めてルームにお便りします。山手先生つて清新なパツションにあふれた素晴らしい方ですのね。夢介のおほらかさ、お銀の意地っ張り。ほんとに似合の好一対ですわ」(岡山・浅野貴美子、昭和二五〔一九五〇〕年六月五巻六号)というように、女性からも相当な人気を博していたことが分かる。

加えて小池一夫も「当時、街中に貸本屋がありました。(略)その貸本屋さんにね、山手樹一郎先生の『夢介千両みやげ』という小説がありました。これが面白くてねえ。オランダお銀という女スリと、のんびりしたお

侍の恋愛物ですね。その恋の有様、それから剣のあり方、そういうものをどきどきワクワクしながら読んでました。(略) 山手先生の作品というのは、必ず恋愛が絡んだ時代劇なんで本当にドキドキしてね。恋のやり取りというのが、僕も思春期でしたから、今でいう『萌え』心ですかね、山手先生の小説を読んで一八〇センチの大男が『萌え』てたんですかね(笑)。

山手先生が書かれた小説を、毎日のように貸本屋を漁って歩きました。安い料金で借りられたから、ほとんど読みつくしてしまっ、山手先生の大ファンになってしまったんですね。『東京に出て行ったら、絶対に山手樹一郎先生の弟子になって小説を書くんだ』そんな気持ちで、その頃には生まれていました」『狼の夜話 俺、劇画、四〇年』平成二四「二〇二二

年二月、小池書院」と述べている。

[46] 「鬼姫しぐれ」、「美女峠」、「又四郎笠」は、三作合わせて『又四郎行状記』として現在まとめられている。

[47] 昭和二三「一九四八」年二月から『講談倶楽部』に連載された「新編 八犬伝」は、覆面作家として書いた者だった。目次にも覆面作家となっている。しばらくして昭和二五「一九五〇」年五月二巻六号からは、山手樹一郎の名前が明らかになっている。しかし村上元三は「山手氏のこと」『大衆文芸』三八巻六号、昭和五三「一九七八」年七月、新鷹舎)において、「戦後、『講談倶楽部』に、覆面作家という名で『八犬伝』が連載され、正体は誰なのか、作家仲間や編集者のあいだで、いろいろ取沙汰された。しかし、連載第二回目で、正体は山手樹一郎、とわたしにはわかった。作中の会話の中で、『済みません』というのを『済みません』と書く癖が山手氏にある

からであった」と述べており、村上元三にはバレていたことが分かる。

[48] 「遠山の金さん」に対して山手樹一郎は、「私は遠山左衛門尉景之の史実はあまり調べていない。が、巷説に出てくる遠山の金さんは好きだ。後に名奉行になった人だし、金さんを捕物帖の主人公にしてみましたおもしろいだらうと思つて書き出したのがこれだ。しかし私にはどうも捕物帖がうまくこなせないと思えて、半分人情話になつてしまつたが、私の好きな金さんの形だけは駆けていると思ふ」『新大衆小説全集 九巻』昭和二五年一月、矢貴書店)と書いている。

[49] 註「46」に同じ。

[50] 註「46」に同じ。

[51] 「野ざらし姫」は笹本寅「混乱の中に復古調 最近の時代小説を展望する」『時事新報』昭和二八「一九五三」年二月二日、時事新報社)において、「この二、三年以来のもので、最もいゝ作品になるものではないだろうか」と評されている。

[52] 「むすめ月夜」は、現在では「竹の市の娘」と改題されている。

[53] 「夜馬車」について山手樹一郎は、「種本は篠崎鉦造著『幕末百話』と、『明治編年史』を参考にした」『時代小説』昭和二三「一九五八」年一〇月、東京文芸社)と書いて居る。

[54] 「念流中興の剣豪」は、現在では「念流中興の人々」と改題されている。

[55] 「青春峠」は、前篇が「青春峠」後篇が「青春の風」という題名になっている。

[56] 「三郎兵衛の恋」は、他にも数篇ある「忠臣蔵」を扱った著作である。この

解説で山手樹一郎は、「小説を書くようになってから、私はぜひ私の義士銘銘伝を書いてみたいと思いい立ち、長年心がけてはいるが、やっぱり無精な性分から、まだほんの数篇の短篇小説しか書いていない』『時代小説』昭和三一「一九五六」年一〇月、東京文芸社」と述べている。

[57] この随筆で山手樹一郎は、「時代小説を書いていると、作中の人物がしばしば道中をするようになるから、私はいつも、『五街道細見』を机上に用意しておく。『五街道細見』とは今の旅行案内を絵図にしたもので私が使っているのは安政五年版の『五街道細見』というのである」と書いている。また「あのことこのこと（一七七）『山手樹一郎全集 一七巻付録』昭和三七「一九六二」年一月、講談社）によれば『大日本人名事典』を使用していることも分かる。山手樹一郎が著作活動の際に、使用している資料は今まで不明だったので、これも新たな発見である。

[58] 「お助け河岸物語」は、現在では「お助け河岸」と改題されている。

[59] 昭和三七「一九六二」年二月から『新週刊』で連載された「俺たちの青春」は同年五月で中断された。

[60] 木屋進『忍者霧隠才蔵』（昭和三九「一九六四」年九月、双葉社）に山手樹一郎は「監修のことば」として、「霧隠才蔵という人物が実在したかどうか、ということとは問題ではない。権力の座をめぐる、人と人が殺し合う境遇のなかにあつて、自らの願望をすべて否定しながら、若い生命を燃焼させていった人間の宿命が現代人の共感をよばずにはいまい。忍法小説の面白さを満喫させながらそこをついた作者の意図を高く買いたい」と記している。

[61] 「幸福を売る侍」は、現在では「殿さま浪人」と改題されている。

[62] 「愉しからずや青春」は、現在では「青空の如く」と改題されている。

[63] 「三日女房」は、現在では「江戸へ逃げる女」と改題されている。

[64] 「句集 冬ごもり」は山手自身が「私は日記というものをほとんどつけていないので、この年代別の俳句ノートが、なにかを思い出して、あれは何年ごろのことだったかなあと考えるような時、これが唯一の手がかりになることが多い」と述べているように、昭和一四「一九三九」年から昭和四七「一九七二」年にかけて創作した俳句を集めたものである。

山手は俳句の造詣が深く、『読物と講談』（公友社）では読者から投稿された俳句の選定を担当していた。「秋風や 見上げるばかり 白き船」（横浜・佐藤信太郎、昭和二六「一九五一」年一月六巻一三三号）には「白き船があざやかである」と、「玉突き音耳につく 夜長かな」（松山・花本春子、昭和二六「一九五一」年一月六巻一三三号）には「夜長がよく出ている」と、「夏の雨 胡瓜の花に 乾きけり」（福岡・中川甚平、昭和二六「一九五二」年一月六巻一三三号）には「つかみどころよし」というような簡単な評を附している。また「愛読者ルーム」でも「小生疎開より帰京して約二ヶ月年毎月近所の本屋より読講を求めて愛読して居ります。殊に山手樹一郎先生の俳句は楽しみで毎月投稿して居ります。一日も早く先生の選に入る日を期対（原文ママ）して励んで居ります」（東京・伊藤芳司、昭和二六「一九五二」年一月六巻一三三号）というような反響の声もあつた。

【紙誌出版社一覽】

『週刊朝日』朝日新聞社 / 『週刊朝日 別冊』(朝日新聞社) / 『文芸朝日』(朝日新聞社) / 『家の光』(家の光協会) / 『オール小説』(江戸書院) / 『近代ロマン』(近代ロマン社) / 『キング』(講談社) / 『講談倶楽部』(大日本雄弁会講談社) / 『少年倶楽部』(講談社) / 『小説現代』(講談社) / 『小説サロン』(講談社) / 『サロン』(銀座出版社) / 『面白倶楽部』(光文社) / 『新読物』(公友社) / 『読物と講談』(公友社) / 『別冊 読物と講談』(公友社) / 『傑作読切』(石神書店) / 『週刊サンケイ』(サンケイ新聞出版局) / 『週刊サンケイ別冊』(サンケイ新聞出版局) / 『潮』(潮出版) / 『読物時事』(時事通信社) / 『ホープ』(実業之日本社) / 『漫画サンデー』(実業之日本社) / 『国民の友』(社会思潮編集局) / 『明星』(集英社) / 『主婦と生活』(主婦と生活社) / 『主婦の友』(主婦の友社) / 『新週刊』(新週刊社) / 『大衆文芸』(新小説社) / 『大衆文芸』(新慶会) / 『評判倶楽部』(新小説社) / 『読切小説倶楽部』(新小説社) / 『新生』(新生社) / 『少女画報』(新泉社) / 『モダン日本』(新太陽社) / 『週刊新潮』(新潮社) / 『小説新潮』(新潮社) / 『別冊小説新潮』(新潮社) / 『日の出』(新潮社) / 『特集人物往来』(人物往来社) / 『新文庫』(新文庫社) / 『少女号』(小学新報社) / 『クラブ』(世界社) / 『富士』(世界社) / 『蚕糸の光』(全国養蚕農業協同組合連合会) / 『ルビー』(大道書院) / 『大衆文学』(大衆文学社) / 『りべらる』(太虚堂書房) / 『週刊東京』(東京新聞社) / 『読物街』(東京読物出版社) / 『小説倶楽部』(桃園書房) / 『小説CLUB』(桃園書房) / 『小説春秋』(桃園書房) / 『医家芸術』(日本医家芸術クラブ) / 『実話と読物』(博文閣) / 『実話と講談』(土曜文庫) / 『朝日』(博文館) / 『奇譚』(博文館)

／『少女世界』(博文館) / 『少女文芸』(博文館) / 『少年世界』(博文館) / 『譚海』(博文館) / 『新少年』(博文館) / 『文芸倶楽部』(博文館) / 『幼年世界』(博文館) / 『講談雑誌』(博友社) / 『人情講談』(サンライズ書房) / 『講談世界』(奈良屋書房) / 『読切講談世界』(新樹書房) / 『新青年』(博友社) / 『花馬車』(花馬車社) / 『傑作読切集』(東海書院) / 『月刊中国』(広島中国新聞社) / 『傑作倶楽部』(双葉社) / 『週刊大衆』(双葉社) / 『科学と国防 譚海』(文京出版) / 『オール読物』(文芸春秋) / 『中央公論』(中央公論社) / 『週刊文春』(文芸春秋社) / 『平凡』(平凡出版株式会社) / 『エロティック・ミステリー』(宝石社) / 『サンデー毎日』(毎日新聞社) / 『別冊サンデー毎日』(毎日新聞社) / 『毎日グラフ』(毎日新聞社) / 『読切小説特集』(雄鶏社) / 『講談の泉』(矢貴書店) / 『小説の泉』(矢貴書店) / 『太陽少年』(妙義出版社) / 『月刊読売』(読売新聞社) / 『週刊読売』(読売新聞社) / 『小説と読物』(桃園書房) / 『旬刊ラジオ』(ラジオ東京) / 『小説公園』(六興出版社) / 『旅の味どころ』(味どころ社) / 『月刊いけぶくろ』(池袋社) / 『朝日ジャーナル』(朝日新聞社) / 『婦人生活』(婦人生活社) / 『上野』(上野のれん会編集部) / 『タカラノクニ』(小学新報社) / 『隨筆手帳』(日本作家クラブ) / 『浅草』(東京宣商出版部) / 『旅』(日本旅行社) / 『にっぽん読切小説読物』(日本社) / 『大衆小説』(双葉社) / 『別冊大衆小説』(双葉社) / 『特集 大衆小説』(双葉社) / 『大衆小説』(双夢社) / 『大衆小説界』(中矢書房) / 『大衆雑誌』(桃園書房) / 『読切ロマンス 別冊』(睦書房) / 『講談と娯楽』(須田町書房) / 『読物と漫画』(大阪新聞社) / 『花形講談』(双葉社) / 『任侠講談』(西銀座出版社) / 『読切講談』(読切講談社) / 『大衆文学研究』(南北社) / 『漫画日本増刊』(大阪新聞社)

／『四国春秋』(四国新聞社)／『読切読物』(読切読物局)／『読切読物』(日本文華社)／『読物の泉』(東亜出版社)／『時代読切傑作集』(銀座文庫)／『読切傑作小説』(読切小説社)／『少女クラブ』(大日本雄弁講談社)／『読切小説集』(荒木書房)／『読切小説集』(テラス社)／『小説会議』(小説会議同人会)／『サッポロ』(サッポロビール株式会社)／『自然と盆栽』(三友社)／『岡山合同新聞』(合同新聞社)／『北海道新聞』(北海道新聞社)／『中部新聞』(中部新聞社)／『河北新報』(河北新報社)／『夕刊とうほく』(河北新報社)／『時事新報』(時事新報社)／『都新聞』(都新聞社)／『西日本新聞』(西日本新聞社)／『毎日新聞』(毎日新聞社)／『産経新聞』(産経新聞社)／『産経時事』(産経新聞社)／『東京タイムズ』(東京タイムズ社)／『山陽新聞』(山陽新聞社)／『報知新聞』(報知新聞社)／『北国新聞』(北国新聞社)／『信濃毎日新聞』(信濃毎日新聞社)／『サンケイスポーツ』(産経新聞社)／『内外タイムズ』(内外タイムズ社)

【附記】

今回の調査では国立国会図書館はもちろんのこと、公益財団法人日本近代文学館、東京都立中央図書館、同多摩図書館、財団法人三康文化研究所附属三康図書館、財団法人大阪児童文学館に大変お世話になった。ここで感謝の意を表したい。山手樹一郎研究の新たな一步にこの年譜が貢献すれば願ってもないことである。今後は山手の著作自体と共に、新たに発見した童話をもとに、山手の童話作家としての一面についても論じていきたいと考えている。

(かげやま・りょう 本学博士後期課程一年)